

ても淨瑠璃を觀ても聖人と。賢人と。學者と。普通の男子と。普通の女子と。其の内にも。多く差がある。其れから小兒と。各々其境界に於て。見聞の仕方が違ふ。又解し方も違ふ。大人は大人だけに解了する。小人は小人だけに解了する。其他禽獸昆蟲各々其の境界に幾段の差別があるか知れないほどぢや。それく皆な解しかたが差別あり。……古歌に……『手を拍てば。下女は茶をくむ。鳥は起つ。魚は集り來る猿澤の池』とある。猿澤の池は（大和國の名所）サア是れぢやテ。唯だ一ツの拍手でさえも。下女は下女だけに聴取り。鳥は鳥だけに聞き取り。魚は魚だけに聞き取て居るではないか。是れはかの金口一音演說法。衆生其の類に隨つて各々解することを得ると云ふ經文の和譯の歌とも可申である。

かの活禪談とても其の通りで。あれを讀でも。チットモ解らない人がある。又少々解る人もある。中位に解る人もある。大に解る人もある。讀むに及ばない解り切て居ると云ふ人もある。君の如く吾れを菩薩と見る人もあれば。又中にはかの活禪談を讀て吾を外道なりと見る人もあるさうだ。現に禪門の高僧ぢやと名を擧げて居る方で。左様に申されて居ると云ふことを聞いた。一ツの活禪談でも。よむ人の見識の高低、深淺、厚薄、廣狹、大小に依て皆な解しかたが違ふてくるものであることはチャンと決定されてあるのぢや。故に虻蜂は到底人間の痴人にも遙に及ばない。人間は佛祖に及ばない。佛祖の言はれたことを聞て妄誕虚説ダと攻撃する者がある。佛祖は決して妄誕虚説を吐かれ無いが。人間の境界の見識では明解らないか

ら。妄誕虚説だらうと想て居るだけの者である。虻蜂は人間の事が解るものではありません。糞蟲が糞の中に生れて。糞の中に生活して。ウチャ／＼と生存競争して遂に糞の世界たるを看破する蟲が無いが。人間の眼から見れば憐れなものぢや。……人間が五慾の濁世に生まれて其間に住して。ウチャ／＼でもあるまいが。財、色、食、名、睡、生、老、病、死四苦八苦の苦界に生存競争して居るのをば。佛阿彌陀様の御慈眼から御覽なされば實に慙むべきものに相違ない。其れをも知らないで傲慢な氣持で居る人たちの多いのには實に呆れる。……今君が吾れを菩薩と言はるゝが。左様に見る人の境界が最早菩薩の境界に至られたるからの事なるべし。吾れ豈に菩薩ならんや。已に菩薩の境界に至れば何事を見聞するも皆な菩

薩に見えるものなり。是れから六ヶ條の答辯に及ぶ。……(一) 抹香の匂ひと白粉の香と。いづれが快きか。形山答ていはく。人の心に取捨。憎愛。醜美の凡情を脱離した時は。白粉の香が佳いの。抹香の匂ひがフル臭いのと云ふ見解は立たないものぢや。又人に依ると抹香が好て白粉香をさらひだと云ふものもある。かのナポレオンは香水の匂ひが大のさらひで有つた。其れがために愛の失敗を取つた美人が有つたさうだ。すきだ。さらひだ。と云ふ事やら。美だ。醜だ。愛だ。憎だ。と云ふことは皆な妄情ぢや。妄情を掃へば抹香も白粉香も取捨の二見は立たない……(二) 鉦の音と三味線の音といづれが快きか。……形山答ていはく。此れも亦其の人の時に臨んで。取りやうが違ふが前に云ふた如く。是非だ。取捨

ダノ。すき。さらひ等の二見を拂へば。どちらがどうとも言へない。
 人に依ると三味線の音がさらひぢやと言ふ人がある。人に依ると鉦
 の音がすきぢやと云ふ人もある。土地の風俗に依ると婚禮の式場で
 鉦鼓を鳴らして念佛唱へると大にさらふ處もあるさうだ。又土地の
 風俗に依ると。葬禮の場で三味線をならせて歌舞すると大に無禮ぢ
 やと云ふて怒る處もあるさうだ。これも時と場合とによると見える。
 人は皆な三味線をすくやうだが。あれも錢の飛で遁げる音ぢやと思
 へば。左程面白いものでも無い。いかなる音楽を聞くと。聞いた
 ら聞いたまゝで執着の念さえなくば一向好嫌善惡のなきものなり。
 ……(三)佛像と美人の裸體畫といづれが有りがたきか。…
 形山答ていはく。此れも其の人の歸依不歸依に任せをくべきものぢ

や。裸體の美人畫に歸依するも可なり。佛像を禮拜するも可なり。
 鰯の首を信仰するも可なり。其處に一點の色相を認むれば邪見に陥
 る。形山の如きは佛像もよし。裸美人もよし。あつても可し。なく
 ても可し。一向さしつかえは無い。ある時は裸美人を禮拜するも可
 し。ある時は佛像を焼て脊を焼るも可しぢや。…(四)釋迦と
 猫と何れが賢なるや…形山答ていはく。佛ももとは凡夫なり。
 猫も衆生の仲間なり。心佛衆生三無差別平等の法門から言へば。佛
 も猫も平等一體の佛性ぢや。何んぞ賢不賢を論ずるにいとまあらん
 や。けれども差別の法門から論ずる時は矢張り釋尊は佛なり。猫は
 畜生である。(五)形山と娼妓と馬と何づれが賢なるや。…形
 山答ていはく。諺にも藝は道に依て賢しとやら。娼妓や馬の作業に

ても仲々悉らひ事がある。形山等の及ばぬ所がある彼れらも亦形山に及ばぬ所がある。總て何の業に拘はらず其の本分を盡すと云ふことが一大事である。松は松の本分あり竹は竹の本分あり。梅は梅の本分あり。各々其本分を盡すのが天真の妙理である。然らば萬物各皆賢なり。形山も亦娼妓や馬と成つた時には。あく迄も娼妓や馬たるの本分を盡すに努力めんと欲するものなり。……(六)形山の著書の比較的高價なるは如何……形山答ていはく。活禪談は吾が著名にかゝるといへども。其の代價の収入は一錢たりとも形山の與づかり知らざる所のものなり。元の禪雜誌に載せたる饒舌録をば。其のまゝ編纂して發行せしものなり。故に其の著書の代價の高低貴賤は。佛教書肆光融館へ照會せらるべき者なり。然れども若し人あ

りて酒樓に登り。種々さまざまの割烹を命じて。食ひ盡して後ちに代價を要求せらるゝに至てから。グヅ／＼と苦説を述て。代價が高いの低いと言へば。體裁の善いものか悪いものか考えて覽給へ云。』……とかやうに言つてやつた。すると先方もなか／＼英いものぢや能く解て居て。からかつたものであるから。直に謝まつて來た。……謹て書を禪師の座右に寄す。不肖禮を失するの罪深し。願くは一日の閑を得て。師の尊居に到り。叩頭罪を謝せんと欲す云云(中略)突飛至極の者に有之候。世の禪を云ふ者。枯禪の名を以てす。しかるに師の如きは。實に活禪師なり。不肖謹て教を受く。弟子たるの契を結ぶを得んか。峰須某頓首再拜。……として手紙をよこした。……時に午後六時が鳴つたから一同開散した。

◎精神的衛生 (第五回)

近來は冬になれば避寒。夏になれば避暑。又は海水浴ダノ海風浴ダノと云つて。猫も杓子も海濱に出かけることが大流行と成つて來たソコデ海濱の魚蝦鷗鷺等も機を忘るゝなどと云ふとは昔物語りと成つてしまつて。今は却て投機心、貪利心が起て。なんでも海濱に家を建て又は地を買ひ込んで置いて都人士の高需に應ぜんと早くも合點して。現に暑中にも相ひ成ると。粗末なる茅屋でさえも一室一ヶ月借賃金參拾圓位フンだくるさうダ。故に大磯も江の島も鎌倉も皆な俗了してしまつた様子ぢや。どこへ遊びに行ても眞純なる風流の處は最早無く成つたとである。世の中がかやうに成て來るに就けては。なんでも精神的衛生。精神的避寒。精神的避暑と云ふに志とさねば

ならん、衛生の事とても。今現に市區で設立してある衛生會の如きは全く機械的と云はんか。形式的と云はんか。ほんの申しわけのため看板を掛けて入費を取りに巡るだけらしい。其の實は何んの益もしない。これは吾輩が實際慨嘆する所ぢや。かやうな不潔な市中に住居するには是非とも自分で精神的衛生と云ふとをやらねばならん。この精神的衛生。避暑。避暑をやるは禪心を涵養するに如くもは無いのである。これは虚言で無いよ。之れを知ら無い人は知るまいが。已に知つて居る人は確かに知つて居るのである。……この形山は古から虚妄な言を吐いたことの無い人物なりと自分で保證する。又吾輩は天稟正直だから虚言は吐けないのである。又ウソと云ふことは全く影も形も無いことは言へないものださうである。吾

輩の友人に何某と云ふ人があるが。この人は鹿見島市の産であるが。その人の話に。鹿見島の舊藩政時代には罪人を刑罰する。其の處刑に依ると。鬼界が島や。大島などへ流すと云ふことが有つたさうである。士族などでは。いづれも多少に拘はらず文學武藝の修養はあるから。島流しに處せられて。其の島に居ると。島人の子弟に教育をするのださうです。其れでマア島人にも敬はれて居るし。其れゆへに島人の眼中に文字と云ふものが映ずることに成てある。其の時代の事ですから教課書は。いはゆる實語教トカ。童子教トカ。商賣往來トカ。庭訓往來トカ。國名づくしトカ云ふやうな者である。或る時何某と云ふ者が。非常な亂暴したと云ふ科に依つて大島へ流罪に處せられて行つた。すると例に依て島人の子弟等が今度新に來

られた御武家様に讀書手習を教へてもらうとて大勢でやつて來て何卒教授を願ひ度いと云ふ。ところが此の御武家様の何某は亂暴する位の人物だから腕力武術は強いかも知れぬが。文字の方はサツパリ知らない。いはゆる眼中一丁字無いと云ふ御方である。ソコデ此人非常に當惑致した。けれども。まさか文字は知らぬとも薩摩隼人の氣性として仲々言ひ斷れない。ソコデよし／＼教へてやる。明日から來いと云つて其の日は歸へした。サア其の日から何んと教へて善いやらチットモ分らん。庭訓往來の本をひろげて見ては。いろ／＼と教へることを工夫した。文字は一字も知らないのであるから。本の中に無い事柄を好いころ加減に作て。其れを都合よくウニヤ／＼と讀て教へたさうだが。段段と日が重なるにつけて何んにも種子が

無く成て其の好い加減な事も言へなく成つたさうだ。ソコで其の人の言ふには。全く影も形もないウンと云ふものは吐けるもので無いと云ひましたとサ。ダカラ形山は虚言を吐か無いのみならず虚言が吐けるもので無い。これに就けても思ひ知れ釋尊は四十九年の妙説。中にも六道輪回。三世因果の説の如ときは。他の儒者は之を妄誕虚説として攻撃するけれども。其は儒者の眼力が及ばないのである。全く影も形も無い事を滔々と雄舌を振つて四十九年も説法して居られるものではありませぬ。精神的衛生。精神的避寒避暑の法が禪理に依て悟れたならば。風流を買ひ盡くして錢を費さずぢや。大暑炎熱の際。三間の茅屋の下に坐して居ても一向さしつかえは無し。洒々落々ぢや。這中の消息を詠じた者は唐の白樂天ぢや。白樂

天の詩にかやうなのがある。

○苦熱題=恒禪師室

白 居 易

人々避暑走如狂。獨有禪師不出房。可_三是禪房無熱到。但能心靜即身涼。

とある。なか／＼妙味がある。「人々暑をさけて走て狂するが如し」トハ現今都人士が世の流行に隨て。ヤア避暑ぢやと。江の島、鎌倉、大磯、箱根へ狂走するあるさま。ソハ皆な形式的衛生。精神的は何にも無い。「獨り禪師の房を出でざるあり」トハ是れ禪理に依りて精神的衛生あるもの。避暑など、別に吾が房を出づるに及はず。精神的避暑法あるに依て。「是れ禪房熱の到ること無かるべけんや。但だ能く心靜なれば即ち身涼し」と。これは老子のいはゆる「心勝熱」と

合意したる立案である。「心静即身涼」是れ禪心ぢや。禪心能く熱に勝つのである。風流を買ひ盡くして錢を費さずとは這中の消息ならずや。……………

○稻村ヶ崎

過日も吾は江の島の辨財天へ參詣して歸りに途を七里が濱の海上を一葉の扁舟に帆を揚げてやつて來ると。丹崖峙ちて碧波岸を拍ちて洶然白日の雷を轟かす。是れぞ勤王家新田義貞が寶劍を投じて干汐を龍神に祈りし處の有名なる稻村ヶ崎である。こゝらこそ記念碑なぞを建て玉垣でも造て標繩を張て嚴かしく新田公の精忠を表章して置くべき處である。しかるに巍然たる館宅が見えるから船頭にあれは誰れの家ぞと問うたら。あれは東京の井上某伯の別荘であります。

いつも藝妓など御連れになつて大さはぎで御遊戯がありますと聞いて吾輩もハアさうかとも何んとも二の語が出なかつたよ。……………だうです今の勤王家は左様な御方が多いのであるから。世上の風俗が悪いつとか何んとか言ふふけれども。先輩が皆なさういふ風ダから後輩の者が悪く成るは尤もである。稻村ヶ崎は歴史上有名なる勤王家の古跡である。しからは紀念碑でも建て嚴然と保存すべき神聖の處と致しをくやうに致すが勤王家たる者の仕わざでないか。しかるに妓を携て來て遊場に供しをくトハ如何に太平の餘澤とは申しながら。餘り感心の出來たものでも無いではないか。故にいはいはく今の勤王家は皆な偽勤王なりと。

○阿伝鉢羅婆

とか云ふ妖僧。米倉逸平の女婿とか、華嚴宗の僧正ぢやとか。自稱世尊ぢやとか宣言して妙な事を言ッて愚夫愚婦を魔魅しつゝあるやう子ぢや。現に田中宮相の夫人等は夫の信仰者ぢやと云ふ。小石川關口臺町に大なる邸宅を建築したと云ふ。過日も某新聞紙に攻撃評が掲げて有つたが。吾輩に言はせると。阿伝鉢羅婆位はまだく山師の小なる者ぢや。彼れらは可愛相な者ぢや。外には随分人民の膏血を絞りあげて贅澤三昧をきめ込んで居る者が澤山あるけれども。其の方は新聞記者も攻撃は得致さず。漸く小山師のアウンバラバを攻撃するとは。トンチンカンな世の中ぢや。吾人の最も憂ふる所の妖教は耶蘇である。耶蘇は奪國の先鋒隊である。我が國體に害毒を與ふる者はヤソである。しかるに我國民たる者之を憂ひざるトハ果

たして何んの心ぞや。阿伝鉢羅婆。白蓮教會。天理教の如き者は。百千群り來るとも。形山が意に介するに足らざる者なり。

○星亨の幼時

東京市赤坂區青山に玉窓寺と云ふ曹洞宗の寺がある。其寺は元は今青山御所の處に在つたさうだ。今から三四十年も前の事であるが。星が未だ十歳に成たか成らぬか位な時分のころでせう。彼れが母親と玉窓寺の門番の部屋に住居してをつたさうです。星は其の時分から例の亂暴な舉動であつたので殆ど人を困らせたさうです。けれども其の時分から矢張り讀書癖が有て。間さえあれば何なりと書物を讀みをつたさうです。神鞭知常は幼年の頃からの管鮑の友ださうである。神鞭は漢學が出来るシ。星は英學が出来るので互に交換した

と云ふことである。星が玉窓寺の門番部屋に居つた時。いたづらに小さい華表を造つて同寺の和尚に贈た。兒童の細工としては上出来である。今に其の華表は眞ッ墨色に成て臺所の神棚に立てゝある。星は玉窓寺とは仲々關係のある身の上なれども彼れが政治社會に勢力を得て横暴を逞ふする様に成つてからは。チットモ顧み無つたさうだ。之れを以ても彼れの無情なる所。推して知るべきである。彼れが終りを全ふせざるは。所以無きにあらず。學問を澤山して讀書萬卷に及ぶも本性の惡な人物は矢張り悪い事より出来無いものと見えるワイ。古語にも。牛の飲みたる水は乳と成り。蛇の呑みたる水は毒と成るとある。シテ見れば學問は一ツであるに相違無きも。其の應用する人物に依て善惡邪正のけじめが出来るのである。宜なる

哉正人法を用ゆれば邪法も亦正法と成り。邪人法を用ゆれば。正法も亦邪法と成ると古聖は已に穿て居らるゝが。畏しいものぢやナ。……しかるに今時の人々は。たとひ不正横暴を逞ふしても身が富貴に成りさえすれば豪ひく。彼れは豪ひ豪傑ちやと賛歎して欽慕して居る者があるが。あれは如何なる心得て居るのであらうか。吾輩にはチットモ分りませんが。若しも之れを是として社會の風俗浴々として皆な然りとせば。實に國家の爲めに痛嘆の至りに堪えないワケである。

拂。拳。棒。喝。

◎三千年以來の蓄音器

と云へば。仲々古い物で。當今流行する西洋蓄音器が。未だ發明せられざる以前より傳來したる者で。サア御聽なされ。サア御聽なされ。イヤ成田屋。イヤ音羽屋——イヤ助高屋——ナソと囃したてるやうな蓄音器とは。稍や其の選を異にしたるもので。すなはち二月十五日は。我教主瞿曇氏が。三千年以前。娑羅雙樹間に涅槃に入りたまひたる忌辰。八万の大衆は申すに及ばず。一切の万物までが悲哀に沈み。夜叉の目にも。雨の如き涙をこぼした時である。世人は皆な人の死したりと聞かば直に嗚呼無常なる哉と嘆聲を發しまするが。私は左様には思ひません。あながち死ぬことばかりが決して無常では有りません。生れることも亦無常であります。人が母の

胎内にやどるのに日限を定めたことは有りません。一切衆生皆な縁に隨て生じ。縁に隨て滅し。滅も無常なれば。生も亦無常なり。故に四句の偈に。諸行無常とあるではないか。ソコデ人間有相の上に於ては。いろ／＼の規定がある。先づ天子様が御隠れに成りたのを崩御と申し奉り。大名の御他界に成りたのを薨去と申し。大夫のなくなられたのを卒去と申し。士のなかりたのを死去と申し。僧侶のなかりましたのを遷化と申し。木拽のなかりましたのをいき引き切つたと云ひ。染物屋のなかつたのを。あいはてた(藍盡の義乎)と云ひ。飛脚屋のなかつたのを。いきついた(到着の義乎)と云ひ。團子屋のなかつたのを。ごねたと云ひ。牛のなかつたのを。とんだと云ひ。草木のなかつたのを。かれたと云ひ。近頃。耶

蘇の方では。人のなくなつたことをば。永眠と唱えてをるさうです。今こゝに二月十五日は釋尊の涅槃忌と唱えて。何方の寺院にも皆な其の法會を營むこととありますが。即ち三千年以前。釋迦牟尼如來が御隠れに成つた之れをば。涅槃と唱えます。涅槃とは梵語で。漢土に譯して不生不滅と申します。釋迦牟尼如來の境界には。生死は無いのである。假りに方便をもて寂滅の相を示されたのである。故に之を涅槃即ち不生不滅と唱へるわけである。釋尊。そのかみ袈羅雙樹の間に於て示寂せらるゝ前に。遺弟子のために教誨を垂れ遺されたのを。遺教經と申しまして。日本縮刷大藏、辰字の函。卷の十に。佛垂般涅槃略說教誡經一卷。亦、佛遺教經とも名づけてある。佛教を奉ずる四衆即ち比丘、比丘尼。優婆塞。優婆夷等は皆な

此の遺教を信受致すべきものである。佛の宣はく。自今以後。我が諸の弟子。展轉して之れを行ぜば。則ち如來の法身常に在して滅せざるなりとある。此の福音。三千年以前より末世の吾人に至て尙ほ其の餘韻孌々として傳へらるゝは誠に難有仕合せに存ぜらる。サア一切の衆生たち。吾れ今こゝに於て此の福音の御取次を致すほどに。座上に坐しながらなりとも。天井の上に居なりとも。壁の中になりとも。柱の中になりとも土の中なりとも空中なりとも。水の中なりとも。山の上なりとも。林の間なりとも。塵。埃。芥。糞の中なりとも。方住方位。各自から其の位に住しながら。篤と謹んで聽聞せられよ。

○佛遺教經

姚秦三藏法師鳩摩羅什譯

大日本 若生形山解譯

○論釋大科。分爲七分。一序分

釋迦牟尼佛。初め法輪を轉じて。阿若憍陳如を度し。最後の說法に。須跋陀羅を度し給ふ。度すべき所の者は。みな已に度し訖つて。娑羅雙樹の間に於て。將に涅槃に入り給はんとす。この時、中夜寂然として聲なし。諸の弟子のために略して法要を説き給ふ。』

此れは是の經の序品である。《阿若憍陳如》。陳如是姓。火器と譯す。阿若は無知と譯す。《娑羅》經音卷二に曰く。娑羅。泥洹經に。堅固林に作る。法華句解に曰く。此の樹。冬夏凋まらず。木中の王と爲す。涅槃後分。林間縱横十二由旬、天人大衆。咸皆徧滿す《涅槃》涅槃は奴結の切。韻鏡に清濁。本朝古來。清にして半

音を用ゆ。槃は蒲官の切。羽濁。本朝には清音に讀み來る。《弟子》學。師の後に居す故に弟と言ひ。解。師に従て生ず故に子と稱す。

○二、修習世間功德分。分爲七

初。誠三邪業

汝等比丘。我が滅後に於て。當に波羅提木叉を尊重し珍敬して。闇に明に遇ひ。貧人の寶を得るが如くすべし。當に知るべし。此れは則ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも此に異なること無けん。淨戒を持つ者は。販賣。貿易し。田宅を安置し。人民。奴婢。畜生を畜養することを得ざれ。一切の種植。及び諸の財寶。皆な常に遠離すること。火阬を避くるが如くすべし。草木を斬伐し。

土を墾し地を掘り。湯藥を合和し。吉凶を占相し。星宿を仰觀し盈
 虛を推歩し。曆數算計することを得ざれ。皆な應ぜざる所なり。身
 を節し時に食して。清淨に自活せよ。世事に參預し。使命を通致し
 呪術し。仙藥し。好みを貴人に結び。親厚嫺慢することを得ざれ。
 皆な作に應ぜず。當に自から端心正念にして度を求むべし。瑕疵を
 包藏し。異を顯はし衆を惑はすことを得ざれ。四供養に於て。量を
 知り足ることを知て。趣に供事を得て。畜積すべからず。此れ則ち
 畧して持戒の相を説く。戒は是れ正順解脫の本なり。かるがゆへに
 波羅提木叉と名づく。この戒に依り因て。諸の禪定。及び滅苦の智
 惠を生ずること得。是の故に比丘。當に淨戒を持つて。毀缺せしむ
 ること勿かるべし。若し人能く淨戒を持てば。是れ則ち能く善法あ

り。若し淨戒無ければ。諸善功德。みな生ずることを得ず。こゝを
 以て當に知るべし。戒は第一安穩功德の所住處たることを。」

この一段は。すべて諸の作業に。邪念をもて作すべからざることを
 誡められたるものなり。正念をもて作すとさは、諸業皆な善業
 なり。佛事門中。不捨一法。治生産業。悉く實相に合ふ。『婆羅提
 木叉』梵語で。漢土に。戒と譯す『販賣』説文に、賤く買ひ貴く賣る
 を販と云ふ。徐が云く。善く販ふ者は。早には則ち舟を資り。水
 には則ち車を聚む人は棄て我は取る。常情と反す。『畜生』新婆沙
 の釋に曰く。畜は畜養を謂ひ生は衆生を謂ふ。彼の横行稟性愚痴
 にして自立すること能はず。他に畜養せらる。故に畜生と名づく。
 四分律に曰く。比丘、貓狗を畜ひ。乃至衆鳥并に畜ふことを得ざ

れと。《種植》植、或は殖に作る。并に時式の切。種うゑるなり。《墾土》今經の音釋に曰く。墾は月很の切。耕なり。又、田を開き力を用て土を反すなり。《占相》占は測なり。卜ひくなり。爾雅の註疏に曰く。占して兆さざしを視。以て吉凶を知るなり。相とは。周禮。筮人上春に筮めとを相す。註に曰く。相は更に其の筮さしを選択するを謂ふ。易の句解に卦に交々あり。變易して以て吉凶を人に告ぐ。《星宿》五星。二十八宿等なり。五雜俎卷の一に曰く。星宿の宿の字。俗に音秀。然るに辰の舍する所。止宿の義あるときは則ち音夙しよくも亦可なり。陰符經に云く。天、殺氣を發して星を移し宿を易へ。地、殺氣を發して龍蛇、陸に走り。人、殺氣を發して、天地反覆す。則ち夙しよくの音に従ふこと久し矣以上。代醉卷の一に。癩眞子を引く。謝氏と

同じ。又、韻會小補屋韻。宿しよくの字の下に止なり。又、星宿なり。釋名は宿は宿なり。言ふは星各その所に止宿するなり。《推步》後漢の馮鯤が傳に曰く。推お歩の術に善し。註に。日月五星の度。昏。且。節氣の差さを謂ふなり。《算計》計は。去霽韻。吉詣の切。算なり。籌策なり。吳音は下を沒す。《媒慢》經音十四に曰く。媒せうは相列の切。郭璞が曰く。相あひ親み狎るゝなり。慢は我慢即ち不敬なり。《瑕疵》上は麻の韻。何加の切。宮濁玉の病なり。下は支の韻。才支の切。商濁病なり。又黒類なり。補註に玉の病を瑕と云ふ。《供養》飲食。衣服。臥具。湯藥を。四供養と云。法華文句に曰く。通じては三業みな是れ供養。別して論ぜば其の依報を施すを。名づけて供養と爲す。《趣得》經音卷の一に。法炬陀羅尼經第三卷に曰く。

趣足。註に十屢の切。趣は猶ほ纏のごとき也。《畜積》瑜伽三十九に。蓄積に作る。薩婆多毘尼卷の四には。畜積に作る。三字并に同じ。經音十七(四)曰く。畜は耻六の切。聚なり。藏なり。包なり。篇海に。許六の切。義同じ。

二、誠根心

汝等比丘。常に能く戒に住す。當に五根を制して。放逸して。五慾に入らしむることなかるべし。たとへは牧牛の人の。杖を執つて之れに視せしめて。縦逸して人の苗稼を犯さしめざるが如し、若し五根を縦にすれば。唯だ五欲のみにあらず。將さに涯畔無ふして。制すべからざるなり。亦惡馬の。轡を以て制せざれば。將當に人を牽て。坑塹に墜さしめんとするが如し。如し劫害を被むるも。苦、

一世に止まる。五根の賊禍は。殃累世に及ぶ。害を爲すこと甚だ重し。慎まざればあるべからず。是の故に智者は。制して而も隨はず。之れを持すること賊の如くにして。縦逸ならしめざれ。假令ひ之れを縦にすると。皆な亦た久からずして。その磨滅を見ん。この五根は。心を其の主と爲す。この故に汝等。當に好く心を制すべし。心の畏るべきこと。毒蛇。惡獸。怨賊大火よりも甚し。越逸なること未だ論するに足らざるなり。譬へば人あり。手に蜜器を執つて。動轉輕躁して。但だ蜜のみを觀て。深坑を見ざるが如し。又、狂象の鈎なく。猿猴の樹を得て。騰躍踔躑して。禁制す可きこと難きが如し。當に急に之れを挫て。放ならしむること無かるべし。此の心を縦にすれば。人の善事を喪ふ。之を一處に制すれば、事

と○辨○ぜ○ず○と○云○ふ○こ○と○無○し○。○こ○の○故○に○比○丘○當○に○勤○め○精○進○し○て○汝○が○心○を○折○伏○す○べ○し○。』

此の一段は。心猿意馬。煩惱の賊。本心を害し。延いて他に及ぼし。諸の善事を壊ることを誡められたり。『縦逸』上は足用の切。放なり。肆なり。下は走兎を以てす。兎設訕にして善く逃ぐなり。又、奔るなり。『坑堦』上は塹溝なり。又、阬に作る。下は坎と同じ。陷なり。險なり。小阱なり。『賊禍』禍字當に上に連ねて讀むべし。禍は害なり。又、毀なり。言ふ心は毀滅する也。『足論』論は曉也。譬也。告也。俗、喻に作るは非也。『蹕躑』蹕は踈なり。猿の跳るなり。躑は投なり。抛なり。『籌量』算なり。』

三、誠多求

汝等比丘。諸の飲食を受くること。當に藥を服するが如くすべし。好きに於ても悪きに於ても。増減を生ずること勿れ。趣に身を支ふることを得て以て。飢渴を除け。蜂の花に採るに。但だその味のみを取りて。色香を損せざるが如し。比丘も亦爾なり。人の供養を受けて。趣に自から惱を除け。多く求めて。その善心を壊ることを得ることなかれ。たとへば智者の。牛力の堪ふる所の多少を籌量して。分に過して以て其の力を竭さしめざるが如し。』

此の一段は。人の供養を受けて。貪慾の念を起すことを誡められたるものなり。清淨にして無染着の心を涵養することを勧められたり。蜂の花に採るの譬諭。最も妙味あり。』

四、誠睡眠

汝等比丘。晝は則ち勤心に。善法を修習して。時を失せしむることなかれ。初夜にも後夜にも。亦廢することあること勿れ。中夜に誦經して。以て自から消息せよ。睡眠の因縁を以て。一生空しく過して。所得なからしむることなかれ。當に無常の火の諸の世間を燒くことを念じて。早く自度を求むべし。睡眠すること勿れ。諸の煩惱の賊。常に伺つて人を殺すこと。怨家よりも甚し。安んぞ。睡眠して。自から警寤せざるべき。煩惱の毒蛇。睡て汝が心に在り。たとへば黒虻の。汝が室に在りて睡むるが如し。當に持戒の鉤を以て。早く之を屏除すべし。睡蛇既に出てなば。乃ち安眠すべし。出でざるに而も眠むるは。是れ無慚の人なり。慚耻の服は。諸の莊嚴に於て。最も第一と爲す。慚は鐵鉤の如く。能く人の非法を制す。是の

故に比丘。常に當に慚耻すべし。暫くも替つることを得ることなかれ。若し慚耻を離れば。則ち諸の功德を失ふ。有愧の人は則ち善法あり。若し無愧の者は。もろくの禽獸と相異なること無し。」

此の一段は。睡眠を誡められたり。睡眠は畢竟心の怠慢より起る所の者なり。人。愧を知りて道に進むべきことを勧められたり。漢儒いはく。耻を知るは勇に近しと。亦是の意なり。『睡眠』睡は坐して寐むるなり。眠は目を翕すなり(誦經)文を見るを讀と爲し。常に得て忘れざるを誦と爲す。又。文に背くを誦と云ふ(屏除)屏は弃除なり。放去なり。或は屏に作る。屏は即ち除なり。(暫替)暫は久しからざる也。替は廢也。滅也。又。代なり。

五、誠、瞋、恚

汝等比丘。若し人あり來りて。節々に支解するとも。當に自から心を攝て。瞋恨せしむること無かるべし。亦當に口を護りて惡言を出すこと勿るべし。若し恚心を縱まゝにすれば。則ち自から道を妨げ。功德の利を失す。忍の徳たること。持戒苦行も。及ぶと能はざる所なり。能く忍を行ずる者は。乃ち名づけて有力の大人と爲す可し。若し其れ。惡罵の毒を歡呼し。忍受して。甘露を飲むが如くすること能はざる者は。入道智慧の人と名づけず。所以いかんとなれば。瞋恚の害は則ち諸の善法を破り。好名聞を壞る。今世後世の人。見んことを喜はず。當に知るべし瞋心は。猛火よりも甚し。常に當に防護して。入ることを得せしむることなかるべし。功德を切る賊は。瞋恚に過ぎたるは無し。白衣は受欲。非行道の人なり。法とし

て自から制すること無きすら。瞋猶ほ怒むべし。出家行道。無欲の人にして。而も瞋恚を懷くは。甚だ不可なり。譬ば青冷の雲の中に。霹靂、火を起すは。所應にあらざるが如し。』

瞋恚とは怒なり。此の一段は。怒りを慎み忍ぶべきことを誡められたり。忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所以なり。最も信受すべきなり。『惡罵』惡は於各の切。不善なり。又、烏故の切。憎なり。罵は言なり。『受欲』下の無欲に對して文義甚だ妙なり。

『可恕』心を以て物を度るを恕と云ふ。『霹靂』雷の急に激するを霹靂と云ふ。』

六、誠、憍慢

汝等比丘。當に自から頭を摩づべし。以から飾好を捨て。壞色の

衣ちやくを著ちやくし。應器おんぎを執持しやくぢして乞こを以て自活じかくす。自から見るに是の如し。若し憍慢じやくまん起らば。當に疾く之れを滅すべし。憍慢じやくまんを増長ぞうぢやうするは。尙ほ世俗白衣じやくはくも宜しき所にあらず。いかに況いはんや出家入道しゆくあの人。解脱げつだつの爲ための故ゆへに。自から其の身を降くだして。而も乞こを行ぎやうずるをや。』
此の一段は。人みな憍慢多し。故に之れを制して謙遜けんそんの行ぎやうひを勸められたる也。『所宜』宜は安ずる所也。理に適ふなり。當なり。其の事に宜き也。

七、誠詔曲

汝等比丘。詔曲てんごくの心は。道と相違さうぢす。是の故に宜しく應こまに其の心を質直しちじくにすべし。當に知るべし詔曲てんごくは。但だ欺誑ごわうを爲すことを。入道の人は。則ち是の處こゝなし。是の故に汝等。宜しく應こまに端心たんしんにして質

直ちぢくを以て本もとと爲すべし。』

此の一段は。阿諛諂佞あげんてんべいは小人の所作にして。道人の所作にあらず。道人は宜しく天真爛熳てんしんらんまん。樸直質素こくぢくしつそなるべきを勸誘こんすゐせられたるなり。『詔曲』詔は諛也。佞也。面従を諛と云ふ。佞言を詔と云ふ。昏は陷なり。人に詔べつちふ者は。人を惡をとしに陷おとしる。人を陷おとしる者は必らず其の身に及ぶ。故に文に於て言昏を詔てんと爲す。『欺誑』欺は誑也。詐也。誑は惑まどなり。』

○三成就世間大人功德分八

初、少欲功德

汝等比丘。當まよに知るべし。多欲たよくの人は。多く利を求むるが故に。苦惱くなうも亦多し。少欲せうよくの人は。求め無く欲無ければ。則ち此の患あやひ無し。

直爾ちに少欲す。尙ほ應に修習すべし。いかに况んや少欲の。能く諸の功德を生ずるをや。少欲の人は則ち諂曲して。以て人の意を求むること無し。亦復、諸根のために牽かれず。少欲を行ずる者は。心則ち坦然として。憂畏する所無し。事に觸て餘りあり。常に足らざる事無し。少欲ある者は。則ち涅槃あり。是れを少欲と名づく。少欲は是れ知足安分の心なり。道人よろしく是の心を涵養すべし。〔坦然〕坦は寛き貌。又、平夷なり。安和の義。〕

二、知足功德

汝等比丘。若し。諸の苦惱を脱せんと欲せば。當に知足を觀ずべし。知足の法は。即ち是れ富樂安穩の處なり。知足の人は。地上に臥すと雖ども。猶ほ安樂なりと爲す。知足の者は。天堂に處すと雖ども。亦意に稱はず。知足の者は富むと雖ども而も貧し。知足の人は。貧しと雖ども而も富めり。知足の者は。常に五欲のために牽かれて。知足の者の爲に憐憫せらる。是れを知足と名づく。』

精神上の快樂は。貧富貴賤の上に在るにあらず。心に道を得るときは。其の快樂。窮まりなくして。貧富貴賤は。風前の塵の如し。〔五欲〕財欲。色欲。食欲。名欲。睡欲。是れなり。〕

三、遠離功德

汝等比丘。寂靜。無爲。安樂を求めんと欲せば。當に憒鬧を離れて。獨處間居すべし。靜處の人は。帝釋諸天。共に敬重する所なり。是の故に當に己衆他衆を捨て。空間に獨處して。苦本を滅せんことを思ふべし。若し衆を樂ふ者は。衆惱を受く。譬へば大樹の衆鳥

之れに集まれば。則ち枯折の患ひあるが如し。世間は縛著して衆苦に没す。譬へば老象の泥に溺れて。自から出づること能はざるが如し。是れを遠離と名づく。」

道人は静處に閑居して。心を一處に攝し。惱亂せしめざることを要す。『憤鬧』憤は亂也。鬧は猥也。喧囂也。『枯折』枯は木死也。折は斷也。」

四、精進功德

汝等比丘。若し勤め精進するときは。則ち事として難き者無し。是の故に汝等。當に勤め精進すべし。譬へば少水も常に流るゝときは。則ち能く石を穿つが如し。若し行者の心。しばらく懈廢すれば。譬へば火を鑽るに未だ熱からずして而も息めば。火を得んと欲すとい

へども。火、得べきこと難きが如し。是れを精進と名づく。」

陽氣發する處。金石みな透る。精神一到。何事か成らざらん。佛、弟子を提撕せらるゝの親切其れ如し。此。豈に信受せざるべけんや。」

『精進』國語では。くはしくすゝむと讀む、即ち精勵猛進の義也。『鑽火』鑽は穿也。木中に火を取るを謂ふ。

五、不忘念功德

汝等比丘。善智識を求め。善護助を求むることは。不忘念に如くは無し。若し不忘念ある者は。諸の煩惱の賊。即ち入ること能はず。この故に汝等。常に當に念を攝めて心に在くべし。若し念を失する者は。則ち諸の功德を失す。若し念力堅強なれば。五欲の賊中に入ると雖ども。爲に害せられず。譬へば鎧を着て陣に入れば。即ち畏るゝ

所なきが如し。是れを不_よ忘_ら念_んと名づく

不_よ忘_ら念_んとは。道人。時々刻々。正_ち念_んに住_すして放_はた_たざる也。世俗謠に。「思_{おも}ひ出_たすよぢや戀_はれよが薄_{うす}い。思_{おも}ひ出_たさず_に忘_{わす}れ_ずに」と。是なり。たとひ教授の善智識。外護の善護助ありと雖ども。當人の正_ち念_ん忘_ら失_はせば亦_{また}奚_なを以_もてか爲_なさん。正_ち念_ん放_はた_たざる_{とき}は。何_いれ_の日_ひか牢_{ろう}關_{かん}に到_{いた}らん。』《比丘》梵語なり。漢には乞士と譯す。上_{かみ}諸_{しよ}佛_{ぶつ}に法_{ほふ}を乞_こひ。下_{しも}衆_{しゆ}生_{じやう}に食_{じき}を乞_こふ。』

六、禪定功德

汝_{なん}等_{どう}比_ひ丘_{きう}。若_し念_{ねん}を攝_{さつ}むる者_{しや}は。心_{しん}則_{すなは}ち定_{てう}に在_あり。心_{しん}、定_{てう}に在_ある_が故_{ゆゑ}に。能_よく世_せ間_{かん}生_{じやう}滅_{めつ}の法_{ほふ}相_{さう}を_しる。是_{こゝ}の故_{ゆゑ}に汝_{なん}等_{どう}。常_{じやう}に當_まに精_{せう}進_{じん}して。諸_{しよ}の定_{てう}を修_{しゆ}習_{じゆ}すべし。若_し定_{てう}を得_える者_{しや}は。心_{しん}則_{すなは}ち散_{さん}せず。譬_{たと}へば水_{みづ}を惜_{おぼ}むの家_{いへ}は。善_{ぜん}く隄_{てい}塘_{たう}を治_ちするが如_{ごと}し。行_{かう}者_{じや}も亦_{また}爾_{しか}なり。智_ち慧_ゑの水_{みづ}の爲_{ため}の故_{ゆゑ}に。善_{ぜん}く禪_{ぜん}定_{てい}を修_{しゆ}して漏_{ろう}失_{しつ}せざらしむ。是_{こゝ}れを名_なづけて定_{てう}と爲_なす。』

道人。禪定_{ぜんてい}の力_{りき}堅_{けん}牢_{らう}なるときは。諸_{しよ}の虚_こ妄_{まう}の相_{さう}に着_{ちやく}せず。故_{ゆゑ}に諸_{しよ}法_{ほふ}の爲_{ため}に顛_{てん}倒_{たう}せられず。實_{じつ}に安_{あん}樂_{らく}の法_{ほふ}門_{もん}なり。禪定_{ぜんてい}の功_{こう}徳_{とく}。如_{ごと}く此_{こゝ}。《隄塘》隄_{てい}は限_{げん}也。土_{つち}を積_つんで封_{ふう}限_{げん}を爲_なる也。又_{また}、防_{ぼう}也。障_{しやう}也。塘_{たう}は池_{いへ}を鑿_{たく}ち水_{みづ}を注_つぐを云_いふ。又_{また}、隄_{てい}岸_{がん}也。』

七、智慧功德

汝_{なん}等_{どう}比_ひ丘_{きう}。若_し智_ち慧_ゑあれば。即_{すなは}ち貪_{こん}著_{ちやく}なし。常_{じやう}に自_じから省_{しやう}察_{さつ}して失_{しつ}することあらしめされ。是_{こゝ}れ我_{われ}が法_{ほふ}の中_{ちゆう}に於_おて。能_よく解_げ脱_{だつ}を得_え。若_し漏_{ろう}らざる者_{しや}は。既_{すで}に道_{だう}人_{にん}にあらず。又_{また}、白_{びやく}衣_いにあらず。名_なづくる

所なし。實智慧の者は。則ち是れ老病死海を渡る。堅牢の船なり。亦是れ無明黑暗の大明燈なり。一切病者の良藥なり。煩惱の樹を伐るの利斧なり。是の故に汝等。當に聞。思。修。の慧を以て而も自から増益すべし。若し人智慧の照あれば。是れ肉眼なりと雖ども。而も是れ明見の人なり。是れを智慧と名づく。』

智恵あれば眞の文明なり。無智は野蠻なり。般若は大智。大智の功德如何。曰く。無位の真人、面門に現ず。智恵。愚痴。般若に通ず。靈光分明。大千に輝く。神鬼いづれの處にか手脚を著けん。喝。『聞。思。修。』耳に達するを聞と謂ふ。理を究むるを思と謂ふ。行を起すを修と謂ふ。眞諦三藏の曰く。聞。思。修。は覆器の水を受くること能はざるが如し。思。無きは漏器の受くと雖ども而も失す

るが如し。修。無きは穢器の漏失せずと雖ども而も穢れて用ゆべからざるが如し。』

八、究竟功德

汝等比丘。若し種種の戲論は。其の心則ち亂る。復た出家すと雖ども。猶ほ未だ脱することを得ず。是の故に比丘。當に急に亂心戲論を捨離すべし。若し汝ち寂滅の樂を得んと欲せば。唯だ當に善く戲論の患を滅すべし。是れを不戲論と名づく。』

此の一段。戲論の正心を亂ることを呵責せられたる也。戲論とは。清諱なり。戲笑なり。戲弄なり。一切の教門。方便にあらずと云ふこと無し。若し執諍を起さば通じて戲論に歸す。謂く已を執して他を非し。浮詞異論。戲劇に同し。故に戲論と云ふ。』

四、顯示畢竟甚深功德分

汝等比丘。諸の功德に於て。常に當に一心に。諸の放逸を捨つること。怨賊を離るゝが如くすべし。大悲世尊。所説の利益は皆な已に究竟す。汝等但だ當に勤めて之れを行ずべし。若しは山間。若しは空澤の中に於ても。若しは樹下。間處靜室に在ても。所受の法を念じて。忘失せしむること勿れ。常に當に自から勉め精進して之れを修すべし。爲すこと無くして空しく死せば後に。悔ひあることを致さん。我れは良醫の。病を知りて藥を説くが如し。服すと服せざるとは。醫の咎にあらず。又善く導くものゝ人を善道に導くが如く。之れを聞て行かざるは。導くものゝ過にあらず。』

醫王、世を去りて久し。病者、恒沙に滿つ。良藥劑を服せず。此

の病者を奈何せん。噫。『四顯示云々』此の科に示す所は謂く如來の説法。利生始めより終りに至るまで皆な已に究竟す。故に名づく。『空澤』濁水の聚まる所也。

五、顯示入證決定分

汝等。若し苦等の四諦に於て。疑ふ所ある者は。疾く之れを問ふべし。疑を懷ひて。決を求めざることを得ることなかれ。爾時世尊。是の如く三たび唱へたまふに。人間ひたてまつる者無し。所以いかにとなれば。衆疑ひなきが故に。時に阿菟樓駄。衆の心を觀察して。而も佛に白して言さく。世尊、月は熱からしむ可く。日は冷かならしむ可くとも。佛の説き給ふ四諦は。異ならしむべからず。佛の説きたまふ苦諦は實に苦なり。樂ならしむべからず。集は眞に是れ因

なり。更に異因なし。苦若し滅すれば。即ち是れ因滅す。因滅するが故に果滅す。滅苦の道は。實に是れ真道なり。更に餘道無し。世尊、是の諸の比丘。四諦の中に於て。決定して疑ひなし。」

此の科にて。大衆、苦、集、滅、道の四諦に於て。疑惑ありや否やを審にす。蓋しその證入決定して猶豫の心無からんことを欲す。故に名づく。《阿菟樓駄》即ち阿那律陀なり。此には如意と譯す。賢愚因縁經に自から本事を説く。《決定》流を行るなり。斷なり。判なり。」

六、分別未入上上證爲斷疑分

此の衆中に於て。若し所作未だ辨ぜざる者は。佛の滅度を見て。當に悲感あるべし。若し初めて法に入ることある者は。佛の所説を聞

て。即ち皆な得度す。譬へば夜電光を見て。即ち道を見ることを得るが如し。若し所作已に辨じ。已に苦海を渡る者は。但だ是の念を作さん。世尊の滅度。一に何ぞ疾かなるや、阿菟樓駄。此の語を説て衆中みな悉く。四聖諦の義を了達すと雖ども。世尊、此の諸の大衆をして。皆な堅固なることを得せしめんと欲して。大悲心を以て。復衆のために説きたまふ。

汝等比丘。悲惱を懐くことなかれ。若し我れ世に住すること一切するとも。會ふものは亦當に滅すべし。會ふて而も離れざることを。終に得べからず。自利利人の法みな具足す。若し我れ久く住するとも更に所益無けん。應に度すべき者。若しは天上人間。みな悉く已に度す。其の未だ度せざる者も。皆な亦已に得度の因縁を作す。自今

已後。我が諸の弟子。展轉して之れを行ぜば。則ち是れ如來の法身常に在して滅せざる也。是の故に當に知るべし。世は皆な無常なり。會ふものは必らず離ることあり。憂惱を懐くことなかれ。世相是の如し。當に勤め精進して。早く解脱を求め。智慧の明を以て。もろもろの癡闇を滅すべし。世は實に危脆なり。牢強なる者無し。我れ今滅を得ること。惡病を除くが如し。此れは是れ應に捨つべき罪惡の物なり。假に名づけて身と爲す。老、病、生、死、の大海に没在す。何ぞ智者ありて。之れを除滅すること怨賊を殺すが如く。而も歡喜せざらんや。

貪。瞋。痴の三毒。生。老。病。死。四苦等の身は。早く除滅するこ
とを喜ぶ可し。此の科。謂ふ未だ上證に入らざる者は。世尊の滅度

を見て未だ疑を懐くを免れず。故に爲に之れを斷じて。其れをして決定せしむ。故に名づく。《未辨》未辨とは即ち内外凡及び前の三果なり。殘思尙ほ在り。故に悲感あり。《已辨》是れは無學の人。已に見思を盡し三界の苦を出づ。小乗の中に已辨と名づく。其の實は所知障全く有り。故に佛の速滅を見て。生本不生滅も亦無滅を了ずること能はざる故に。《久住》久住無益とは。亦二あり。一には。諸佛住世。止だ説法利生の爲めなり。法已に足れり矣。故に益なしと云ふ。二には。佛もし久しく住するときは、衆生。難遭の想なし。故に無益と云ふ以上

金光明經卷の一に説く。如來斯の短壽を現じて。諸の衆生をして難遭の想を生ぜしむと云云。并に按すべし。《無常》楞伽義疏の四の

上に。日外道は。一物ありて名づけて無常と云ふと計す。譬へば、杖、槌、瓦、石、の自から恒に壞せずして而も能く一切の物を壞するが如し。若し此の無常あるにあらざれば、何が故ぞ諸法有し已りて終に滅せん。佛法の中に據りて。無常名づけて不相應行是れ假にして實にあらざるとなす。有爲の法は。生じ已て必ず滅するを以ての故に無常と名づく。言ふ心は其の無物能く常住なるのみ。別に一物ありて名づけて無常と爲すにあらざる也。(危脆)脆は此苴の切。弱なり又少喫にして斷ち易き也。

七、離種々自性清淨無我分

汝等比丘。常に當に一心に。勤めて出道を求むべし。一切世間。動。不動の法は。皆な是れ敗壞不安の相なり。汝等且く止みぬ。復語い

ふこと得ること勿れ。時將に過ぎなんと欲す。我れ滅度せんと欲す。

是れ我が最後の教誨する所なり。』

佛遺教經。終。

此の段は。世尊、種種の自性を遠離して清淨無我の涅槃に入るに約す。故に名づく。』まづ今日の法話は、是れて了畢。あなかしこ

く。

世間皆火宅。何處覓清涼。
若獲一心靜。現前安樂場。(形 山)

◎虚空有聲錄

○吾れに正法眼藏と云ふ藏あり

諸君よ……と喚びかけるは。諸君の耳朶と視線を吾れの方へ向かし
 びる手段である。ソコで諸君のために何を語ッて聽かしむるか。ツ
 マリ諸君の精神修養に成る良き薬を説き聽かせるつもりである。已
 に吾れは良薬を説く者である。が。諸君に於て之れを服用せらるゝか
 否かは諸君の方に在るのである。信仰して服用せらるれば効能のあ
 ることは言ふまでも無いことである。けれども世人多くは服用せら
 れ無い。之れは薬を説く者の罪ではありません。古より佛祖聖賢皆
 な衆生の病多きがために。種々様々の良薬を説き給ひたること多け
 れども。無病の人少くて。多病の人多きは是れ皆な信仰して服用せ

られざる所以であります。服用せらるゝとも。せられざるとも厭は
 無い。ドシ／＼と説薬致すが吾の本分であるから。遠慮なく説薬い
 たします。先日大和田武雄と云ふ人が来て。貴氏には多分の財産
 を所有せらるゝかと問はれますから。左様で御座る。多分とては無
 いが。國家法律の規定に基く少々の所得税を納むる位な収入はある
 が。別に父母から譲受けた財産と云ふ者は。寸鐵尺土も無い。が。
 吾れには一ツの正法眼藏と云ふ大なる藏を所有致して居ることであ
 る。この藏は世間普通の土藏なんぞとは大に體裁は違ッて居るが。
 實に奇々妙々な藏である。この藏は使用方が良いと如何なる善良な
 事でも。如何なる大事業。如何なる有益な事でも出て來るが。若し
 過ッて使用方が悪いと來た日には、なま藏と成ッて。サツパリ致し

方の無い藏であるすから。御互に注意して。なま藏ナソに致さ無
 いやうに致さうと云ふ考へがある。扱て正法眼藏とは。如何なる藏
 であるかと云ふことを説明致さねばならん。…正法とは邪法に對
 して云ふ言で。すなはち邪法で無い。正法であることである。
 萬古不變の眞理即ち實相眞如。中道にして不偏不倚なる妙法是れ即
 ち正法である。無上最尊勝王の道である。…眼は。マナコである。
 照破を以て義となす。一切諸法を照破するの義である。藏は。クラ
 である。クラは。もろくの寶物を含蓄納藏してある義である。い
 かなる物でも此の藏から出して妙用することが出来る者は出来る。
 出来ない者は出来ないのである。が。出来るやうに勉強いたしさえ
 すれば誰れでも出来るやうに成るやうに出来るのである。先づ

勉強すれば。佛でも菩薩でも。豊臣秀吉でも。ナポレオンでも。ワ
 シントンでも。カントでも。孔子でも。達磨でも。法然氏でも。親
 鸞氏でも。日蓮氏でも。承陽氏でも。誰れでも彼れでも皆な此の藏
 から出るのである。が。しかし此藏も悪く開くと。飛ても無い猛惡
 なものやら。邪曲なものやら。いろく自他を害するものも出て來
 る。これがために種々靜慮して。自他を妨害するやうなものを出さ
 無いやうに致さねばならん。禪定の必要と云ふも。學問の必要と云
 ふも皆な是れがためである。…ソコデ此の藏は。土藏であるか。
 木造であるか。鍊瓦造であるかと云ふに。左様では無い然らば何物
 て築造致したかと云ふに。妙なものて築造致したのである。…金
 剛般若波羅密經で以て築造いたしたのである。へー成るほど妙な物

て築造せられたものでござるな。……ソコデ金剛（英語でダイヤモンド）と申すは喩であります。般若波羅密と申すは法であります。また金剛には。三ツの義が含まれて居りますをもて。三種の般若を喩へたのであります。而して般若は天竺の語で。漢語に翻譯いたして智慧と申しますが。それでは餘り淺近て有がたみが無いから、やはり敬重の方を取て。般若と申し傳へ來たのであります。三種の義とは。其の一には。我も他人も常に用ゆる所の一念の心性は。迷ふとさも。悟るときも。曾て増減なく。常住にて變ぜざるを。實相般若と名けた。たとへば金剛は。もろくの寶の中の最尊最勝にして。侵し毀るべからざるが如きものである。其の二には。能く一切の煩惱を破するを。觀照般若と名づく。たとへば金剛の利用あつて。も

ろくの堅固な物をも能く摧き破るが如きものである。其の三には。一切の縛着を離れて。解脱自在なるを。文字般若と名づく。譬へば金剛の表裏清淨にして。もろくの像の影を現じて明かなるが如し。しかるに此の三ツの義を含める般若を能狂言に用ゆる般若の面の事の様に想つて。別に外にあること、心得違ひ致されては相成ません。そら。そこに人々が日々用ゐて居る所の心性が直に其のまゝ其の物でありますぞ。遠方に求めては。いけませんぞいはゆる吾人現前一念心のあらゆる智覺の性は。どこが限りと云ふことも無く。能知所知と云ふことも無く。是の。非のと云ふことも無く。十方法界に徧ねくして。たゞ一ツの絶對的の體なるは。實相般若であります。……この一念心明了に常に知つて。而も内に在るにあらず。外に在

るにあらず。また内外の中間に在るにあらず。また過去。未來。現今の形跡無きは。觀照般若であります。……この一念心炳然に十界の諸法を同時に現ずるは。文字般若であります。ソコで念の爲めに申し置くが。世間の紙や墨や言語ばかりを文字と云ふのではありません。あらゆる天地。山河。草木國土。明暗。色空等をば皆な文字と云ふのであります。而して此の三つの般若は。前述の如く三つの義あれども。もとより一體なるが故に。派つに愈合し。一體なれども三義あるが故へに。合するに愈分る。是れ即ち一體にして三義。三義にして一體。不離不即と云ふ妙理あつて。縦ならず。横ならず。並べるにあらず。別なるにあらず。此れ是れを不可思議秘密藏と云ひ。また正法眼藏とも云ふ大なる妙な藏である。吾れは此の

藏を證つて吾所有に致した。が。之れを教へて呉られたのは釋尊である。此の藏を證つて。實際吾所有に成つた曉は。法藏自から開けて。受用。意の如くならんと古徳の言はれたが如く。誠に愉々快々な者である。……サテ人々の心性は。本來是の如き結構至極なるものなれども凡夫は迷ふて生死に沈淪して。種々の大苦を受け。諸佛菩薩は。生死を離れて常樂を得給へるは。そもく何としたる事ぞや。是れ別の事にては無い。一切の諸法は。鏡の中の影の如くにて。實性は無き物なれども。其れを實と思ひあやまりしより。常に貪慾。瞋恚。愚痴を起し。財。色。食。名。睡の五慾に執着して。もろもろの悪業を作る故。この悪作業に因つて自から大苦惱を招く。是を自業自得と云つて。他人が作つて我れ之れを受くるにあらず。

諸佛菩薩は。自心を覺悟し。一切の諸法は皆な夢。幻。泡。影の如きてふ理を知りて。大安樂を得給へり。今亦た衆生のために。自心即ち三ツの般若なることを示されて。諸法は本自性無く。悉く露の如く亦電の如くなるの旨を演説し給へり。波羅密とは天竺の語で。漢語に翻譯して到彼岸とも。度彼岸とも云ふ。生死の此岸を度て。涅槃の彼岸に到るが故である。又生死涅槃を俱に此岸となし。生死涅槃にあらざるを彼岸とす。故に云く。此彼の岸を遠離するを乃ち波羅密と名く。其の要領を摘んで申せば。迷ふときは。三般若の全體が。衆生の煩惱業苦と成り。悟るときは。煩惱業苦の當處が。そのまゝ三般若で有つて。更に他物で無いのである。經とは。法と訓む又。常とも訓で。此の般若は。一切衆生の規

と成り。三世易はらざるが故に經と名づく。上にあらまし云ふ所の意を以て金剛般若波羅密經と云ふのである。夫れ宿世の罪障厚き者は。靈感を得ること遅し。しばらく勞苦を作して。漸く餘殃を滅し。餘殃已に盡て。感應乃ち顯るゝのである。之れに就て委しく分別せば四句あり。一に。冥機冥應とは。過去にて善業を修せし者は。現在にさせる善根はなけれども。宿善の力あるを冥機と云ふ。此の類は。眼に佛菩薩の靈應を見ざれども。密に利益にあづかる。是れを冥應と云ひます。二には。冥機顯應と。これも過去に善を植て。その善成熟するを冥機と云ふ。この過去の善に因つて今世に佛を見て。法を聞き。利益を得るを。顯應と云ひます。この人は現世に於ての修行は無けれども。宿善熟せるゆへ。

佛ほとけそれを照てらして度たし給たまへるなり。三さんには。顯機顯應けんきけんおうとは。現在げんざいに精勤修行しやうこんしゆぎやうして懈おこたらざれば佛即ほとけすなはち應おうず。若もし行人ぎやうじんありて。道場だうぢやうに入り。苦到くんごうに禮懺らいぜんすれば。即すなはち能よく靈瑞れいずいを感得かんとくするの類るるの如ごとき。これを顯機顯應けんきけんおうと云いひます。四しには。顯機冥應けんきめいおうと。人ひとありて一生いっしやうの間あひだ。勤苦ごんくしてこまやかに善根ぜんこんを積つめども。顯あらには應おうなし。されども冥めいに利益りやくを得うることあり。これを顯機冥應けんきめいおうと云いふなり。此これ等の意いをしれば。日ひ々善ぜんを修しゆして。させる效無しるしなくとも。曾かつて悔くゆること無し。低頭ていたう擧手きやうしゆの少すこし善根ぜんこんにても。虚むなしからずして皆みな佛道ぶつだうを成じやうずと説とき給たまひたる故ゆゑ。末頼すべたのもしき事ことと思おもひて修習しゆじゆすべきであります。これに例れいして知しるべきは。今世こんせに惡業あくげふを作つくれば。今日こんにち直ちやうにその報はくいなくとも來世らいせには必かならず惡報あくほうあること決定けつじやうである。いはゆる作者さくしや無なく。

受者無じゆしやなけれども。善惡ぜんあくの業がうは敗亡はいぼうもせずと。善惡報應ぜんあくほうおうの事こと。豈あにゆるかせにすべけんや。佛法ぶつぽうは因果いんぐわを辨別わんべつす。覺知かくちするが根本こんぽんである。空腹高心くうふくかうしんにして。因果いんぐわを辨わへざるは。貴たつとに足たらざるものである。世間せけんに喜このんで殺生せつしやうすれども。壽命長じゆみやうながき人ひとあり好このんで布施ふせすれども。貧乏びんぼうなる人ひとあり。或あるいは仁心じんしんなる人ひとも。天あまあり。暴戾ほうらいなる者ものも。壽いのちながものあり。或あるひは惡逆あくぎやくなる者ものに吉事よきこと多おほきあり。節義せつぎなる者ものに凶事あしきこと打うちつゞく事ことあり。此これ等の類るるを見て。世俗せぞく多おほく疑うたがへども。實じつは疑うたがふこと無なきものである。その譯わけは。布施ふせ、仁義じんぎは。今身こんじんに作なす所の善ぜんである。貧乏びんぼう。天死わかにじ。凶事きやうじは前世さきの上に造つくりし所の惡あくにて。今身こんじんに報はくいを受うるなり。殺生せつしやう暴逆ほうぎやくは今身いまのみに爲なす所の惡あくなり。壽いのちなが吉きつ、富とみは前世さきの上の善ぜんにて。今身いまのみに受うる所の報はくいてある。善惡業ぜんあくごうを作つくツ

て。今世にて直に報いを受ることもあり。先づは多く世を隔て報い
 あるものである。この意を知れば。因果報應の道理を信じて。邪思
 悪見を生ぜず。この事を合點せざれば。其の功も無しと思ふて憂悔
 し。終に其の利を失し。悪業を作るに至る。……龍樹菩薩のいはく
 今我が疾苦。みな過去に由る。今生に福を修すれば。報い將來に在
 りと。……かやうな譯で。佛法を證るとは。即ち涅槃を證ることて
 あるが。扱て又因果應報の道理をも是非とも信じなければならん。
 世間には随分之れを信じない人々も澤山あるが。たとひ信じなくとも。
 因果は矢張其の人にも巡り報いて來るのである。是れは如何し
 ても信、不信に拘はらず必ず報い來る者に相違御座らんから。何
 卒諸君方に於ても御謹慎あらんことを希望す。先づ人は謹慎が第一

等であります。謹慎深い人には。如何なる妖魔魍魎も窺ひつけ
 ることが出來ないのであります。……古來英雄豪傑の一生涯の始終
 を取調べて見るに此の因果應報の道理を免れた人物は殆ど有りませ
 ん。故に吾は事實に徴して確かに此の理を信じて居る者でござる。
 ……

柴門深鎖養天真。見色明心日日新。
 春老禪庭無客訪。三旬不掃落花塵。

(形山)

◎因果應報の例

善は是れ至寶。一生之れを用ゐて盡さず。心を良田と爲す。百世之れを耕して餘り有り。宜べなるかな心はまことに良田の如きものであるけれども。其の所有主の農夫が時々刻々注意して深く耕さざる時は草茫々と生ひしげりて善良の五穀もみのることが出来ない。故に佛教では。心を名づけて。心田と云ふてある。この心田。農夫の勤惰によつて荒蕪ともなれば。美田ともなるのである。ダカラ大に修養せねばならん。善は人生の最大至寶に相違は無いが。なぜに人々善を作さずして悪を作して居るは如何。善因善果。惡因惡果とて。善惡各々其の作業に隨て其の果報の至ることは明鏡を掛けて見るが如く明々瞭々。歴々分明であるにも拘はらず。人みな其の惡事を作

しながら其の惡報の至り歸るを恐れず。平氣で居らるゝは誠に淺間敷了見ぢやアありませんか。佛教の此の因果應報の道理を信用致さない輩は漢儒學者と。歐米學者と。日本神道者流に特に多々を見る。此の道理は其の人が肯て信用致さなくとも。事實上に於てドシ／＼と顯はれて來ることであるから無理に信じなされと申すわけぢやア無いが。念の爲めに申して置く。少しは信じられて。平生の御品行上に注意なされるれば。誠に其の功德鴻大でござるぞよ。ナニ六かしい事ではありません。春天に米の種を蒔たるが故に秋日に至りて田埔にドツサリと米稻がみのりて來た。此れ自然の結果でありませう。玄冬に麥の種を蒔きたるが故に。炎夏に至りて麥畦に穰々として黄雲横り來るではありませんか。此れも免るべからざる結果であ

りませう。されば吾人の説く所をば。妄りに迷信くくと排斥致さる
いなよ。いづくんぞ知らん此の迷信者が實の信心者で。迷信ならざ
る人々が却つて迷の深淵に陥りて居らんとは。

こゝは且らく江湖の評判に任せ置かん。……サテ其の因果應報
の例とは如何なる斬新な珍説かと思へば豈に圖らんや陳套なる古説
てはあるが。此れは普通世間の學者學生間に多く讀み知らるゝ書籍
の中から拔出したものである。佛教が。まだ支那へ傳播致さない以
前から。もはや佛教の因果説が流行致して居たらしいよ。……それ
は史記に。かやうに書てある。……白起と云ふ人は。郿と云ふ處の
人であるが。兵法に老けて攻伐。撃戰。侵襲。圍掠等の事が上手で。
秦の昭王に事へて左庶長と云ふ官爵を受けて。追々軍功を積て武安

君に封ぜられ。名聲赫々當るべからざる勢威で。將に三公の位に迄
登らんとした。抑も其のこゝに至りたるは何ぞ。是れより先白起が
趙國の軍と戰つた時。趙の兵四十五萬人を坑殺した。……其の後ち。
意外な處から讒言が這入て。白起は罪も無いのに秦の昭王の怒りに
觸れて自殺を仰せ附けらるゝやうな事に立ち至つた。……秦の昭王
は。使者をして白起に劍を賜ふて自殺せしめられた。白起は劍を取
て自から自分の首を刎らんとして云ふには。我れ天に何の罪あつて。
かく自殺せねばならんやうに立ち至つたので有らうか。と。良久し
ふしてから云ふには。嗚呼我れは固より死ねばならぬ理由がある。
あの趙國長平の戰かひに。趙國の軍卒が。我が方へ降參致した者が
數十萬人であつた。我れ其の降參を聽き入れてやつた上で。又詐は

つて其の數十萬人を殘らず坑うづめにして殺したが。其れ等の報いで。かく冤罪に依て死なねばならんやうに成て來たに相違無いと云つて。遂に自殺致したとある。武安君白起の死んだのは秦の昭王の五十年十一月で有りましたが。其の死んだのは冤罪で。實に死ぬべき罪の有つたわけが無かつたのであるから。秦國の人民たちが皆な可哀相ぢやと云つて御祭を營なんてやつたとある。……

また王翦と云ふ人がありました。頻陽東郷と云ふ處の人であります。少年の頃から兵法を好んで。かの有名な秦の始皇帝に事へました。それから處々方々の戰場へ出まして大に敵國を亡して軍功を立てました。閑話休題。王翦の子王賁は。李信と。燕國。齊國の地を破り定めて。秦の始皇二十六年に盡く天下を併吞して六國を亡してしま

ひました。ソユデ王氏。蒙氏の諸將軍は。軍功最も多いので。威名後世に赫々たるものでありました。秦の二世胡亥の帝たる時。王翦及びその子賁皆な已に死んでしまひました。又彼の奸惡なる趙高等の奸策に依て蒙恬蒙毅等も其の死然を得ませなんだ。……陳勝が兵を起して秦に反さし時は。秦は。王翦の孫の王離と云ふ者に。趙國を撃たしめ。趙王及び張耳をば。鉅鹿城に圍ましめました。が。或る人が説を立て、云ふには。王離は秦國の名將でござる。今彼の強き秦國の大軍を率ゐて新に組織したる趙國の烏合の軍を攻めに來るのであるから。屹度此れは王離が大勝利を得るに相違あるまいとありしかば。ある客のいはく。イヤ左様ではござらぬ。夫れ大將と爲る家柄は三代目には必らず敗亡する者である。其の敗亡する理由は

何てあるかと云へば。其の人を殺伐したことが多き數であるから。その報いで。其の子孫たる者は必ず其の不祥不吉を受くるものである。今王離は。已に王翦から三代目の大將で御座るとありしが。果せるかな。居ること幾何も無くして楚の項羽が趙を救ひ。秦軍を撃ち破り。王離は遂に捕虜となつてホリヨ／＼と涙をこぼして居つたさうです。其の後ち殺された。…また陳平と云ふ人は。陽武戸牖郷と云ふ處の人である。少年の頃は非常な貧窮であつた。けれども讀書が好きであつた。閑話休題。種々様々な苦勞をして。後ち楚の項羽に仕へたけれども重く用ゐて呉れないから。去つて漢の高祖に従つた處が。もとより智謀に老けたる陳平の事であるから。追々軍功を立て。遂に漢の丞相の位迄登つた。後ちに曲逆侯に封せられ

ました。…前漢の孝文帝の二年に。丞相陳平卒しましたから。諡して獻侯と致した。子の共侯買と云ふ者が家督相續仰附けられました。二年目に卒し。其の子の簡侯恢が家督相續仰附けらる。二十三年目に卒す。子何家督相續仰附けらる。三十三年目に。何が他人の妻を奪略したと云ふ罪科に坐せられて市に斬り棄てられ。國も除かれた。陳平が生前の時。人に語つて云ふに。我れ陰險なる謀計を運らして他の敵人敵國を顛覆させた事が多いが。是れ老子道教の深く禁ずる所である。吾が世もし廢せらるれば其のまゝ滅びて。終に再び興起することが出来なからう。何となれば吾れ陰險の禍が多からである。ツマリ陰徳が無いのみならず。陰謀をもて人を覆した報いである。と云ふことであります。後ちに曾孫陳掌と云ふ者

が其の時の勢威ある衛青將軍の子婿たるをもて。陳氏の復封を請願
 したけれども。其の請願は御聞届にならなかつた。……
 李廣は。前漢の孝景皇帝の時の名將でありました。廣は。隴西成紀の
 人であります。膂力、人にすぐれ。強弓の達人であります。能く士
 卒を愛す。士卒皆な廣のために死なんことを樂むと云ふ位である。
 然るに何故か不仕合せてある。廣よりも遙かに下等な才智の人でさ
 えも已に封爵を取たのに。廣は封爵を得ない。廣が幕下に從つて居
 つた兵士でさえも已に封爵を得てしまつたのに。廣は封侯を取ら
 ない。廣は。十六七歳の頃から北方匈奴と。しばしば戦て頭髮已に
 白雪を戴くに至れども未だ封侯を得ない。不仕合も亦甚しいかな。
 ……ソコデある時。李廣。望氣王朔と語つていはく。漢。匈奴を

撃ちしより。しかも廣は未だ嘗て一度とても其の軍中に居ら無つた
 事は無い。而してもろくの部下の校尉以下の者。才能が中人にも
 及ばない。然るに匈奴を撃ちたる軍功をもて。封侯を取る者數十人
 もある。廣の技倆。人に後れたりと云ふわけでも無いのに。尺寸の
 軍功の封侯を得ることなきは。如何なる理由であらうか。なんと吾
 が人相が封侯に當らないので有らうか。かつは固より天命であらう
 かと御問ひになつた。すると。王朔のいはく。將軍御自身の胸中に。
 是れ迄の中に何とか残念な事を仕たと。いたましく思ひなされること
 がありませんか。と。李廣のいはく。ある。吾れ前に隴西の太守
 と爲つた時。羌（エビス）嘗て反す。吾れ誘びき欺むいて降参させ
 た。降参した者八百餘人であつた。が。吾れ其の時詐はつて同日に

之れをみな殺してしまつたが。今に至つても尙ほア、無殘な事を仕
 たと大に殘念に念つて居る。外に何事も無いが。唯だ此の事だけで
 あると。王朝のいはく。ア、其れはマア悪い事をなされたワイ。人
 の禍は。已に降參せし者をば又更らに殺すほど大なる罪は無い。
 此れ乃ち將軍(李廣)が封侯を得られざる所以でありますと。……
 ……：鯨布は。六と云ふ處の人である。姓は英氏。秦の時。布衣
 平民であつたが。ある人が此の人相を見て云ふには。君は刑せられ
 てから王者と爲るであらうと。壯年に及んで國家の法律に觸れて鯨
 の刑を被つた。布欣然として笑ふていはく。ある人が我が人相を見
 て王者と爲るべしといつたのは定めて是れて有らうと。ありしが。
 世人みな之れを聞て共に冷笑した。その後ち項羽に従つて。たびた

び軍功を立て當陽君に封ぜられた。後ち益軍功を立て、九江王に
 封ぜられて六と云ふ處に都致した。後ち漢王に歸服して功に依て淮
 南王に封ぜらる。けれども後ちに意外の處から。禍が生じて遂に
 撃ち滅さるゝに至つた。……司馬遷が是れに論贊を附けて云ふに。
 英布は其の先祖は豈に春秋に見る所の。楚の英六を滅せる阜陶の後
 (子孫の義)なる哉(又ある説に阜陶は舜帝の時の刑法を司る役で
 あつたから。英布は其の後裔であるゆへに。刑を被て王と爲たと
 も云ふ。)その身。刑法を被て。王と爲る何んぞ其の拔興の暴かな
 るや。項氏の坑殺する所の人は千萬を以て數ふ。而して英布は其の
 虐殺する張本であつた。軍功も諸侯に冠たるが此れをもて王者とな
 つたが。亦遂に自身も世の大罪人と爲て終ることを免かれなんだ。

禍わざはひの興おこる。愛あい妾しやうより生しやうじた。妬ねた媚みから患うれを生せいじ。竟ついにに以もつて其そのの國くにを滅はろした噫あゝ可きレ悲ひ哉や。……以上いじやう述べ來きたりたる數す人じんの英えい雄ゆうの物もの語がたりにても略はぼ因いん果ぐわ應おう報ほうの道たうり理りが知しられるのであります。因いん果ぐわは如い何かなる大たい聖せい人じんといへども其そのの善ぜん惡あく相さう當たうの報はくいを受うけずして免まぬかれてしまふと云いふことは出で來きないのであります。孔こう子しの門もん人じんの曾そう參しんと云いふ人ひとがいつたことである。善ぜん事じを積つむ家いえには。意おもしろ外よの處ところから慶えき事じが生しやうじて來くる。惡あく事じを積つむ家いえには。意おもしろ外よの處ところから殃あし事じが起おこつて來くるとある。況いはんや前ぜん述じゆつの數す人じんの英えい雄ゆうの如ごときは皆みなな殺ころを好このみ。殺ころを弄あつしたものであるから其そのの惡あく報ほうは無なくてかなふまじ。日に本ほん歷れき史し上じやうの人物じんぶつでも織お田た信しん長ちやう。平へい清せい盛せい。源げん義ぎ經けい。木き曾そう義ぎ仲ちゆう。源げん賴らい朝ちゆう。足あ利り尊そん氏し等らの事じ蹟せきを歷れき觀くわんするに。隨ずい分ぶん因いん果ぐわ應おう報ほうの話わ柄がらに成なりさうな事ことがある。此これは江か湖こ

の公かう見けんにまかせて置をきませう。

茶道の四德。能和。能敬。能清。能靜

雨聲溪聲大。日斜樹影長。

(山形)

◎。とらの歳

先づ新年御目出度う。相ひ變らず身體健全で。口舌も健全で大法螺を吹き。手足も健全で運歩拮据致し度こと、心佛に祈願致して居る次第でござる。昨年さくねんの一月には。多寶殿と云ふ極々御目出度い。丁度かの謠曲の鶴龜を見たやうな。……ついでに一つ唸りませう。

(シテ)夫れ青陽の春になれば。四季の節會の事始め。(大臣)不老門にて日月の。光を天子の歡覽にて。(シテ)百官卿相に至るまで。袖をつらね踵をついて。(大臣)その數一億百餘人(シテ)拜をすゝむる萬戸の聲。(大臣)一同に拜するその音は(シテ)天にひびきて夥し(上同)庭の砂は金銀の。く。玉をつらねて敷妙の。五百重の錦や瑠璃の扉。碑磔の行げた瑪瑙のはし。池の汀の鶴龜は。蓬萊山も餘

所ならず。君の恵みぞ有り難きく(大臣)いかに奏聞申候。毎年の嘉例の如く。鶴龜に舞せられ。その後月宮殿にて舞樂を奏せられずるにて候。(上地)龜は萬年の齡を歴。鶴も千代をや。重ねらん。

(上同)千代のためしの數々に。何をひかまし姫小松。緑りの龜も舞ひ遊べば。丹頂の鶴も。一千年の齡を君に。授け奉り。庭上に参向申ければ。帝も御威の餘りにや舞樂の秘曲はあもしろや(キリ上同)月宮殿の白衣の袂。くの色々妙なる花の袖。秋は時雨の楓の葉袖。冬はさへ行雪の袂を。ひるがへす衣も薄紫の。雲の上人の舞樂の聲々に霓裳羽衣の曲をなせば。山河草木國土ゆたかに千代萬代と。悦び給へば官人駕輿丁御こしをはやめ。君の齡も長生殿に。君のよはひも長生殿に。還御なるこそ。目出度けれ。』……マア一寸か

う言ふ風なものを物語り。天下太平。五穀豊饒を祈て置いた。ところが昨年は諸國ともに豊年で近年稀有な事ぢやと天下の百姓衆が鼓腹撃壤的に悦んで呉れて居ると申すことを四方八方から特に電報が來たと云ふわけでも無いが。それは妙なもので。壁に耳ありといへば。天に口無しといへども。人を以て言はしむナゾと云ふこともあるから。いかに形山が市中に隠れて居ても天下の出來事が知れないと云ふ道理は決して御座らん筈ぢやナゾと額に青筋を起て、横理窟をこねるにも及ばない事でないか。……ソコデ如何致した。ソコデその何で御座るテ。昨年もマア豊年で目出度かつたが。今年も相ひかはらず。天下泰平。五穀豊饒。五日一風。十日一雨。と能く順氣が整ふてゆくやうに。とら大變ダと云ふやうな事の無い様に。い

のるワケなんですすがな。其れに就て一ツ御話を致さうと云ふので。扱て今年寅の年と申すのであるが。一體全體この年月日に禽獸の名を附けると云ふのは。東洋の從來の習慣で。一寸變に聞えますが。元來これは陰陽學者から出たことでは有りますが。一應は變テコですが。段々と講釋を聽いて見ますと。何んだか。からしの様で。さけばさくほど涙がこぼれるほど感心するやうな有り難い道理の存ることです。

そもく世間の人々が。この寅と云ふこと。虎と云ふこと。の理の。區別を知つたものが少い。から。形山が今日御正月の御慰みに。いさゝか話さう。……寅と云ふ字は略字で詳しく書くと演の字である。演は(ノブル)の義である。伸長する義である。方位で云ふとき

は。東北の間に當る。月で云ふときは正月に當る。律で云ふときは。秦簇にあたります。秦は大である。簇は湊ると云ふ意。言ふこゝろは。萬物始めて大に湊まつて地より出づるのである。丑の時。萬物地中に厄紐して正月すなはち一月の頃すなはち寅の時に至て陽氣大に進んで萬物を地上に見はし生ずる如く伸びやかなるものである。ソコデ寅をば虎と云ふのは。獸の長なりと云ふ義であるさうだ。故に寅は一歳の首に位するものぢやと云ふ。故に今年生れる男子は運氣が甚だ好いと申すことである。何なれば天性自然に威光あつて。義に厚く。爲めに身を果すことも厭はず。俗に言ふ男立の氣性が有つて。物事に感じ早く親切である。この癖は豪性にして容易に人の諫言を聞き入れず。天性。利刀の竹を割るが如く曲ることなく押

し通して進む性質である。又心緩急あり。猛き氣あり。威す威勢あり。心泰然として千里の遠きを謀り。また義談に乘じ勇むときは。非常の大事を謀り樂む癖あり。物事立派にする心あり。萬事少しく度を過すの意あり。器量大きく。味方の爲めに錢金に苦むとあり。官祿大に備はり。福祿は出入最も多しと雖ども常に昇るを好んで寶を散ずることあり。至て高運なるが故に貴上の人には大吉なれども。平人は餘り吉でない。かつ婦女には凶の方である。思ふことも天にも通ずる勢ひにて談判する等速かである。故に物事進歩的。積極的か吉で。天へも通ずるの勢がある。以上の如き運性であるから。武人には大吉である。將官豪商等最も吉である。小事賤業は備はらず。故に諸志願は成就する氣運であるけれども。議論上。金錢上

等から被^{かよ}ひる難^{なん}があるかも知れんから注意^{ちうい}せねばならん。また文學^{ぶんがく}上に付^つては進^{すす}み遅^{おそ}き方^{かた}なれども。後^{のち}には大^{おほ}に活^{くわ}用^{よう}するに至^{いた}る性^{たち}である。なんとなれば。是^これ正^{せい}陽^{やう}なればなり。病^{やまひ}は。手^て足^{あし}の筋^{すぢ}引^ひ攣^{れん}するこ
と多^{おほ}し。逆^{さか}上^{あが}することあり。動^{どう}氣^きすることあり。また。好^{すき}な事^{こと}は。尊^{そん}大^{たい}なること。武器^{ぶき}。施^せ行^{ぎやう}すること。公^{こう}服^{ふく}。人^{ひと}の上^{かみ}に立^たつこと。役^{やく}向^{むか}咄^{ばな}しのこと。我^が意^い。手^て短^{みじ}きこと。また。嫌^{きら}ひな事^{こと}は。佞^こ比^へ諂^{たん}ふこと。金^{きん}錢^{せん}を貰^{もら}ふこと。繰^くりかへし言葉^{ことば}。陰^{いん}氣^きなること。負^まけること。頼^{たの}むこと。小^{しょう}事^じ賤^{せん}事をなすこと。吝^{りん}嗇^{しやく}。儉^{けん}約^{やく}。下^{しも}に立^たつこと等^{とう}である。ソコデついでに言^いつて置^おかう。今年^{ことし}は。壬^{みづのえ}の寅^{とら}であるが。寅^{とら}の講^{かう}釋^{しやく}は仕^したから。壬^{みづのえ}の講^{かう}釋^{しやく}を致^{いた}してをかねばならん。壬^{みづのえ}とは。妊^{じん}である。万^{ばん}物^{ぶつ}を地^ち下^かに妊^{じん}養^{やう}するを言^いふ。妊^{じん}は。(ハラム)と云^いふ義^ぎである。

る。また潤^{じゆん}の義^ぎである。十二^{じふに}支^しに取^とつては子^ねに配^{はい}當^{たう}す。子^ねは水^{みづ}である。天地^{てんち}開^{かい}闢^{びやく}の元^{もと}である。故^{ゆゑ}にその水^{みづ}注^つ々^つとして万^{ばん}里^り窮^{きゆう}まりなし。若^もし此^この氣^きを普^{あま}く人^{ひと}の體^{たい}に稟^{らう}けて生^うまるとすれば。其^その德^{とく}廣^{くわう}大^{たい}にして。天下^{てんか}に普^{あま}及^あし。絶^たえて圭^{けい}角^{かく}あることなし。壬^{みづのえ}と甲^{かのえ}とは。十^{じつ}干^{かん}中^{ちゆう}にて最^{さい}上^{じやう}位^ゐを占^しむるものなれば。自然^{しぜん}と衆^{しゆん}人^{じん}より欽^{きん}慕^ぼ尊^{そん}崇^{そう}せられ。名^{めい}聲^{せい}甚^{しん}だ大^{たい}なるに至^{いた}るものと知るべきである。壬^{みづのえ}寅^{とら}は。かやうな運^{うん}氣^きで。甲^{かのえ}寅^{とら}と殆^{ほと}んど匹^{ひつ}敵^{てき}すと云^いふ。釋^{しやく}迦^か文^{もん}佛^{ぶつ}は。甲^{かのえ}寅^{とら}の年^{とし}の御^ご生^{せい}誕^{たん}ぢやと某^{べつ}書^{しよ}に認^{した}めてあつた。……かやうなわけで。虎^{とら}は百^{ひやく}獸^{じゆう}の長^{ちやう}で猛^{もう}威^いあるもので。我^わ國^{こく}の武^ぶ人^{じん}や。外^{ぐわい}交^{こう}官^{くわん}は。皆^{みな}な壬^{みづのえ}寅^{とら}の歲^{さい}。甲^{かのえ}寅^{とら}の歲^{さい}の人^{ひと}でそろへ度^{たい}ものぢや。其^それが出來^でれば。我^わ國^{こく}の國^{こく}威^いは益^{ます}々^ず萬^{まん}國^{こく}に赫^{かく}々^ずと發^{はつ}揮^きして彼^か等^{とう}を震^{しん}懼^くせしむることが出來^でる。處^{ところ}が彼^かの狐^こと云^い

ふやつは仲々狡黠才のあるもので。うまく虎を欺て己れが威張つたと云ふ話がある。其れから自分に實力なくて。官威とか官規とか云ふものを揮りまはして威張る奴を。虎の威を借る狐と綽名を附けることに成つたのである。虎の話も。いろ／＼あるが。かの支那の五代の時に。王彦章と云ふ節義の高い武將があつた。書物を讀むことはせなかつたさうだ。言語質朴といへども平生嘗て人に謂つていふには。虎は死して皮を留め。人は死して名を留むと云ふことがある。兎に角。人は學問が無くとも。精神が確實で。事業に勤勉するやうな人は必ず一種の格言を吐くものである。是れ亦實地實力から發したものであるから。實に貴いものである。昔から日本には虎は産しない。然るに虎を捕獲した人は澤山ある。……欽明天皇の

御宇に。膳臣巴提使を百濟國に差遣した事がある。一夜大に雪降り。猛虎來て膳臣の子を噬つたので。膳臣は自分で其の猛虎の穴を探て捕獲し。其の皮を持ちて歸朝したと云ふことが日本の歴史に在る。何んと猛勢ではないか。吾が師の佐藤牧山先生が作られた加藤清正虎狩の圖に題したる長篇の古詩がある。其の結尾にかやうな句がある。

『朝鮮有虎虎是鼠。日本無虎虎人是虎。』

と。清正は。虎之助とも名づくから。かやうな事を云つたのでは無い。朝鮮の兵は弱。鼠のやうだ。日本軍は強い猛虎のやうだと云ふ寓意が有りさうに見える。マサカ諛言でもあるまい。あの先生の事だから。……全體とらと云ふものは。上野の動物園の鐵柵の内て

臥て居て。園丁の手から牛豚の死肉を貰つて食つて。食ては寝。食ては寝して居るのが本懐では無いのぢや。矢張深山絶谷に在て。生獸を捕獲して自から食し。天真の猛威を振ふのが本當の愉快ぢやさうで。吾れも虎から之を聽いて始めて感心して。それからと云ふものは。自活と云ふことの愉快なることを悟り。日々孜々汲々と己れの道を主張し。己れが働いて。己れが自活すると云ふ主義で。決して親のすねをかぢつたり佛の餘餐をねらつたりは致さぬ。諸子もチツトは其の思想を持たねばならんゾ。……いつ迄もく何のクソの益にも立ない淫靡なる文學を爲て。張紙の虎の風に吹かれて。フーラフーラフーラフーラとして居るやうな事では。國蠹ぢや。天神地祇に對して慚愧では無いか。ソコデ人間は。學藝習養も必要ぢやが。第

一番に精神の修養が最も必要である。左甚五郎が精神をこめて作つた木偶人は活動したては無いか。之れに反して人間で精神修養の無い人は。全て木偶人同様ぢや。……こゝにかやうな話がある。前漢の孝景皇帝の時代であつたか。李廣と云ふ名將が有て。しばしば北方匈奴と戦つた。匈奴も彼を漢の飛將軍と云ふて。非常に懼怖れて居つたさうだ。ある時李廣出て獵をやつたさうだ。フト草むらの中に虎が居ると思つて。ひやうと矢を放ち。射た。ところが石に中て鐵がグツスリ没つて居つた。よくよく見れば岩石であつた。不思議に思つて。又再び射て見たが矢じりが石へ這入らなかつた。とある。是れがサー妙な話である。……最初虎ぢやと思つて射た矢は這入て。更らに石ぢやと思つて射た矢は這入らなかつたと云ふものは。

全く精神の強弱の作用であらう。なんでも人間は。一生懸命と云ふのが一番強いのである。軍兵でも決死隊と云ふのが一番強い。宋の岳飛が言つたやうなもので。文官不愛錢。武官不惜命。而天下平矣と。然り。近頃の紳士とか。武將とか言ふやうな連中は。坐するに虎皮を敷き。車上にも虎皮を敷て。さうして善事は少しも作さず。不潔な事ばかりやらかして居る。地獄の獄卒も。やはり虎の皮を犢鼻褌にしめ込んで居るやうである。が。悪事業を作す者に限りて虎の皮を用ゆるとは如何であらう。……ソレは理由の有ることよ。虎は猛威なる獸類の長であるから。其の皮だけでも猛威なる餘勢があるから。悪事をはたらく奴輩は。死虎の威を假りてども狐の狡黠を弄した真似を仕やうと云ふ目的であらうか。虎も定めて迷惑

に思て居るだらう。何卒左様な悪人を退治致して。元の君子國に復活致すやうにと一心に祈念して居ると。

夜深童子呼不起。猛虎一聲山月高。

と朗吟して。吾が門前を通過つた人がある。扱て此の詩は。餘程氣韻の高い詩であるが。此の詩を特に朗吟するやうな人も亦定めて氣品の高尙な人で有らうと。心ひそかにゆかしく思はれた。

老松脩竹繞吾屋。鳴鳳龍吟隨意聽。(形山)

◎靜坐の功德

燈、動くときは。物を照すことが出来ない。水、動くときは。物を鑑することが出来ない。静かなるときは。萬物畢く見はるゝものである。人の心も亦たかやうなものである。心、動くときは。萬理みな昏く。心静かなるときは。萬理みな徹るものである。故に心は静かなければ明かなることか出来ない。性も静でなければ養ふことが出来ない。静坐の功德たるや鴻大なる哉。古人いはく静坐すれば。明かなりと。大學にいはく。静かにして後ち能く安く。安くして後ち能く慮ると。顔子未だ三十ならずして。道を聞く者。静の至りである。伊川。其の徒の閉戸澄心静坐する者あるを見るときは。則ち口を極めて稱賛せり。或人、朱子に問ふていはく。程子毎に人の静坐

を喜ぶ。如何と。朱子いはく。静は是れ學者の總要路頭なりと。然り。彼の俗士すら已に静坐の功德を解せるにあらずや。况んや我が大覺王如來の徒たる者にして。静坐の功德を解せずして可ならんや。夫れ静坐は。坐禪なり。坐して静慮沈思する也。静慮沈思すれば。もろくの妄想の黒雲霽れわたりて。真心の明月皎然と現はるゝ也。已に真心の明月皎然たり。こゝに至て一點の疑惑なき筈なり。我が教主大覺王如來も。嘗て斯の静坐の功德に依りて一大事因縁を發明せられたるなり。先聖後賢亦然り。大覺教五千四十餘卷の經典も。此の静坐より發したるものならざるは無いのである。嗚呼静坐の功德豈に鴻大ならずや。静坐は大智の發源なり。

……客。大和田武雄なる者あり。形山に問ていはく。先生は

何事をもて最大愉快と爲すやと。形山之れに答ていはく。余は平生
 文事甚だ多忙なるが。諸人より依頼せられたる事件。或は照會事件。
 或は質問事件等の書類。案頭に累積せり。是れ容易に是れ等の處置
 を附くることならざるも。たま／＼閑暇を得て是れらを處置し了り
 て。義務を果したる時が。最大愉快なり。其の他に快事あるなし。
 他人の質問に應じて。其の人だに悟る所ありたりとて禮状を送らる
 こと有り。是れも亦た快なり。……大和田氏又問ていはく。食
 物の中何物をもて。第一甘味と爲すやと。形山答ていはく。余は食
 物に別に嗜好あること無し。唯だ終日事務に勤勉して。空腹なる時。
 麥飯に澤庵漬物。是れ程甘味なる物。他にある無し。世には山海の
 珍味にあらざれば食はずと云ふ者あるは。彼等は遊惰にして奢侈に

に耽るものなり。……

一點梅花蕊。三千世界響。
 鶯聲天地響。法法法華經。

(形山)

◎人間第一の至寶

「平生に工夫觀念つとめなば。まことの時に心動かじ。」『善を至寶と爲せば。一生之れを用ゐて盡さず。心を良田と作せば。百世之れを耕して餘りあり』。などと古徳がたが。已に述べて置かれたが。扱て人々が是の人間社會に栖息するのは、何でも無いやうに見えて居ても其の實仲々六かしいものである。故に大覺王世尊が。御出世あらせられました。いろ／＼と御親切に教法を御説き下されたのである。後の世の者は。謹みて其の御慈教を承けて。つゝしんで實際に履行ひ。その御慈恩に感謝せねばならのである。そこで今回拙者にも何か大覺王世尊の御慈教の御取次を致しけれとの報知がありましたから。いさゝか御慈教の御取次を致すつもりであります。そこ

て人の社會に栖息するには。いろ／＼の心得か入用である。先づ自身を守る法から。他人に交はる法。君主に對する法。兩親に事ふる法。兄弟に對する法。友人に對する法。社會一般公共に對する法等。一々學んで。學んだ上で自心で能く工夫を凝らし。如何致せば程善く中道が履み行ふことが出来るであらうかと觀念致すが最も肝要である。唯だ學んだばかりで。工夫もせずに。無やみ矢鱈に行りまくりまする時は。往々其の行り方が中正の程善い處に中らぬことが出來て。他人から何んの乎のと批難せらるゝやうに成るものである。能く工夫もせず直に行るは。耳學。口學とて眞實の學問ではありませぬ。……『名聞や浮氣でならふ學問は。身持不埒て口は發明』とあるが。たゞ口ささばかり發明であつて。身心堅固に修まらない日

には。學問と云ふものは。何んの益にも立たないのみならず。却て大害物であります。……『善惡の智慧は其の身の生れつき。身を知るために習ふ學問』と云ふ歌の如くに心得て。なんでも學問と云ふものは。名聞のためで無い。實際修身靜心のためであると云ふ處に逸早く合點致し置かないと。飛んだ大間違ひが出来ますぞよ。此要處は。諸子が平生非常に注意せねばならん事柄であります。折角に學問致しても。耳學。口學で終つては。淺間しき次第であります。現今の學者殿は。大概階級的と形式的との學問で以て大祿を取るだけが最終の目的で。善き人物に爲るの。聖賢の域に達したいと云ふやうな高尚潔白な人物は。一人も無い。まことに痛嘆に堪えないわけである。眞實の學問をなさるが。何よりの肝要でござる。そこで

青年の士女たちの必要の心得は。良き師匠と朋友を擇ぶと云ふことである。良師。良友を擇び取らざるは。一生の大損である。古徳も。水は方圓の器に隨ひ。人は善惡の友に依ると申された。また。俚諺にも。朱にまじはれば赤く成るなどと。申すこともある。花を吹き來りたる風は香く。糞の上を拂ひ來りたる風は臭い。牛の飲みたる水は乳と成り。蛇の呑みたる水は毒と成る。かやうなわけで同じ水でも。同じ風でも。其の觸れ來る處の善惡に依りて。毒とも成れば。乳とも成れば。臭とも成れば。香とも成るではありませんか。……扱て諸子如何でござらふ。人類相互間に於て。最も貴き寶物は何でありませうか。黄金でありませうか。珠玉でありませうか。ダイヤモンドでありませうか。諸子は。定めて是れ等をもて。人間社會

の第壹番の寶物と思つて居らるゝてせうが。この形山は。決してさやうな物をもて最上の寶物とは思ひません。しからば何が最勝最上の寶物であるか。形山は。若し如此訊問に接したならば。至誠あるのみと答えるつもりである。……大凡人類相互間に於て。洋の東西を論ぜず。是の一至誠より貴きものは有りません。男子一至誠ありて人道完全であります。女子も一至誠ありて婦道完全である。古川柳にもある如く。『嫁入りの一の道具は荷にならぬ』と。まことに然り。無形の第一の道具であるから。荷物にはならない。が。是等が極々上等飛び切りの寶物である。人。一至誠ありて人道完全なることを得るのであります。至誠なくて人道に背くのであります。學問の道。他の事は有りません。唯だ是の一至誠の妙味を悟りて行

ふに至るのであります。一至誠と申せば甚だ易さが如く見えます。が。なか／＼左様ではありません。至誠ある人は多く學ばずとも完人であります。人として至誠あらば一生受用不盡であります。御覽なされ。形山はかやうに。説明いたす。誠心もて君に仕ふまつる。之れを名づけて忠と云ふ。誠心もて父母に事ふる。之れを名づけて孝と云ふ。誠心もて朋友に交はる。之れを名づけて信と云ふ。誠心もて社會萬般公共の事に接すれば。事として正義ならざる無く。事として成らざること無きものであります。實に誠心ほど貴重なものはありません。我が大覺王世尊は。我等末世衆生のために。迷ひを翻して悟に入らしむる御教化を垂れ給ひたるは。全く人々の本來の面目たる是の誠心なるものを明かにして。昏きより昏きにたどら

しめざらんことを御誓願なされたのである。今日は。いさゝか諸子
 のために。天地人間最第壹の寶物を進呈致しました。が。しかし。
 是の寶物として。形山が御話申した通り。上手に御用ゐに成れば。實
 に寶物に成りまするか。之れを用ゐなさら無い人は。自身に持ちな
 がら。益に立た無いのであります。この寶物は。眞に妙な寶物であ
 ります。から。何卒寶物の持ち腐りに相ひ成らないやうに御氣を附
 けなされ。……『一心に誠の道に入る人の。その行く末は子孫繁昌。
 ……あなかしこく』。

禪學單刀直入終

明治三十七年九月廿八日印刷

明治三十七年十月 卅日發行

定價廿五錢

著者 若生國榮

東京市神田區四紅梅町十番地

發行者 平本正次

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 藤本兼吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

發行所

東京市神田區四紅梅町十番地
 (電話本局二千九百九十九番)

光融館



不許轉載

光融館出版書籍地方大賣捌所

熊大博同廣同同大同同同同同同同同同同京岡岐同同同名
 本分多 島町 備後 二 六五 油 都 古
 阪條 條條 路條條崎阜 屋

長甲積洗積吉柳吉若柳村法爲顯興出貝伊郁其文永川
 崎斐善心善岡原田林 上 道教雲葉藤 東瀨
 次治支書支平兵書書 兵 書書書書文 書代
 郎平店房店助衛店店軒衛館館院院店院司堂堂堂店助

同同橫龍同札弘仙新松甲長三水長富高小金同同同福

濱野 幌前臺瀉本府野條原岡山岡松澤 井

勉弘有伏振富今藤北高朝西樋西目中學字字日平酒品
 強集隣見進貴道 泉崎美澤口村黑田 都都 澤井川
 次書書書 光 陽喜 海宮宮新 安太
 堂堂堂屋堂堂郎店社店館郎店平郎店堂平平館助衛門

光融館出版禪學書類

天桂禪師提唱

(三版)

碧岩錄講義

▲和裝帙入全三冊定價貳圓七十錢 ▲洋裝全一冊定價貳圓半錢 小包料各五錢

山田孝道師校注

(三版)

禪門法語集

洋裝定價一圓五十錢 小包料十五錢 (三十種三十三冊合本凡八百頁)

森大狂居士校注

(再版)

續禪門法語集

洋裝定價二圓小包料十五錢 (三十五種四十一冊合本凡千貳百頁)

山田孝道師著

(四版)

坐禪用心記 普勸坐禪儀 講義

全一冊

定價二十錢

郵稅四錢

一

岸生國榮師著

(再版)

寒山詩講義

和裝 定價四十錢
郵稅六錢

森大狂居士參訂

(三版)

一休和尚全集

和裝 全一冊三百頁
定價四十錢郵稅六錢

禪學編輯局參訂

(再版)

白隱和尚全集

和裝 美本 三百頁
定價四十錢郵稅六錢

森大狂居士參訂

禪林叢書 第一篇

和裝、東坡禪喜集、澤庵和尚垂示、正眼國師眼目、定價三十五錢郵稅六錢

全

禪林叢書 第二篇

和裝、居士分燈錄、道元禪師和歌集、法燈國師法語、定價三十五錢 郵稅六錢

釋宗演師著

(再版)

寶鏡三昧講義

大內青巒居士著

碧岩錄十則講義

高田道見師著

十玄談講義

江村秀山師著

偽仰要路講義

山田孝道師著

(三版)

證道歌講義

全一冊 定價十六錢
郵稅二錢

山田孝道師著

(再版)

信心銘講義

全一冊 定價十錢 郵稅二錢

東山領禪師著

達磨禪經說通考疏

美濃大判 全六冊(品切) 定價三四 郵稅卅錢

若生國榮師著

(四版)

●禪學叢書第一編

通俗活禪談 第一輯

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

全

(三版)

●禪學叢書第二編

通俗活禪談 第二輯

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

禪學合本

第一卷十冊合本五十五錢第二三卷十五冊合本七十五錢第四卷十冊合本五十五錢第五卷十冊合本五十五錢郵稅各十錢

釋宗演師著

(三版)

靜坐のすゝめ

定價貳錢 郵稅四冊迄貳錢

織田時能師著

(再版)

大乘起信論義記講義

全一冊 定價七十五錢 郵稅八錢

島地默雷師著

(三版)

維摩經講義

全一冊 定價三十八錢 郵稅四錢

大内青巒居士著

(六版)

原人論講義

全一冊 定價二十五錢 郵稅四錢

全

(六版)

般若心經講義

全一冊 定價十五錢 郵稅四錢

佛說法滅盡經

釋宗演師著

(再版)

金剛經講義

山田孝道師著

(三版)

佛教すゝめ

曹洞在家日課要集

山田孝道師著

學道用心集講義

白隱禪師著

(再版)

ねほけの目ざまし

新刊雜著

六

和裝 全一冊 定價貳拾錢 郵稅四錢

全一冊 定價三十錢 郵稅六錢

全一冊 定價三十錢 郵稅二錢

全一冊 定價三十錢 郵稅四錢

定價六錢 郵稅貳錢

鷺尾順敬先生著

日佛家人名辭書

山田孝道師著

●禪學叢書第三編

殺活自在

禪門鐵鎚

齋藤惟信師著

佛教倫理の大觀

安部正人編

鐵舟隨筆

若生國榮師著

●禪學叢書第五編

單刀直入

禪學正門

七

全一冊 正價八圓 郵稅五十錢

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

大和綴 全一冊 定價十二錢 郵稅四錢

全一冊 頗美裝 定價六十錢 郵稅十錢

全一冊 定價廿五錢 郵稅四錢

村上專精先生著

大乘佛說論批判

全一冊

定價五十錢
郵稅八錢

曹洞宗坊局文書課編纂

修證義說教大全

(新版)

定價五十五錢
郵稅六錢

後藤北溟禪史著

●禪學叢書第四編

修養禪話

(新版)

定價廿五錢
郵稅四錢

田中仙樵先生著

茶禪一味

全一冊 近

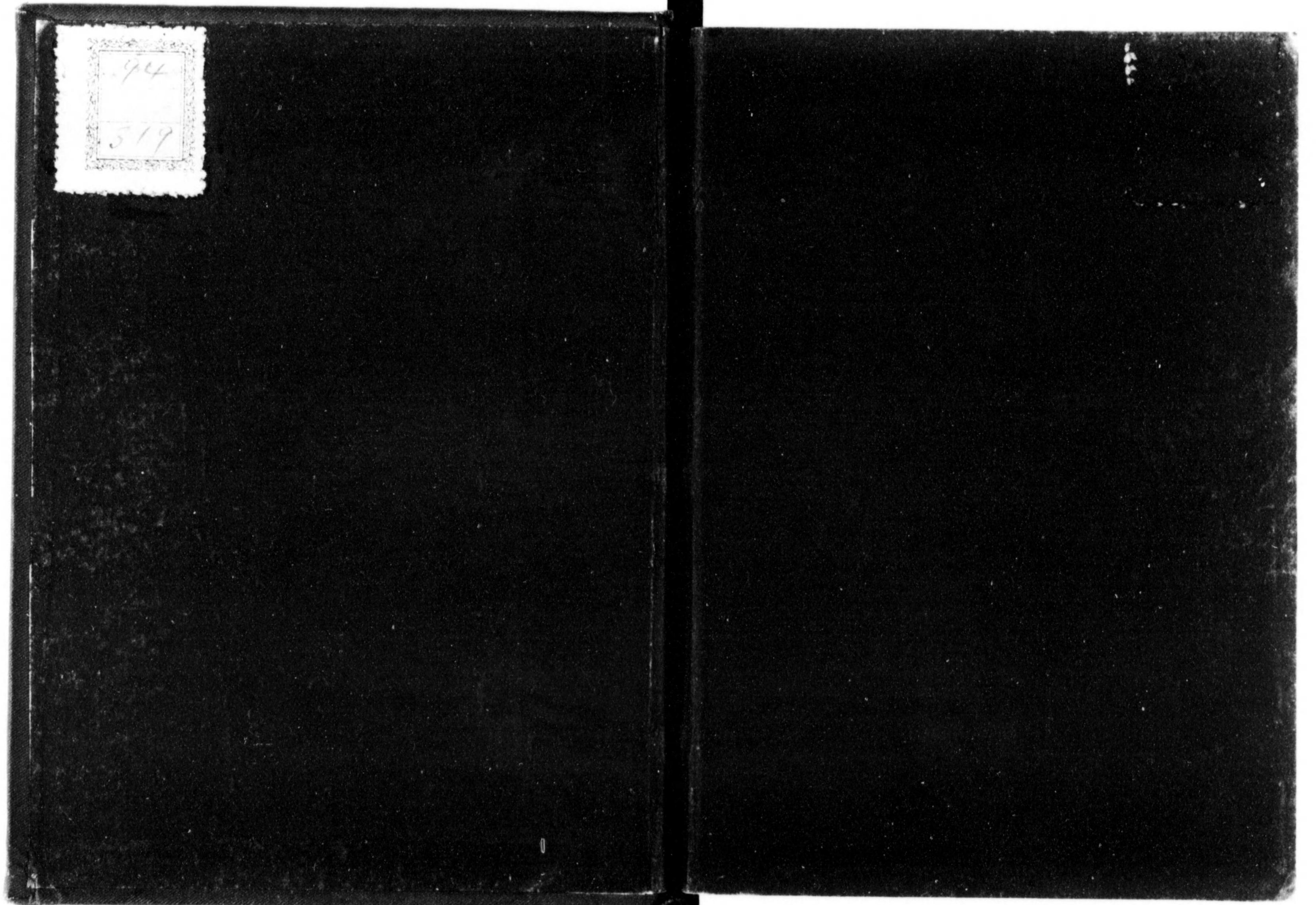
刊

若生國榮師著

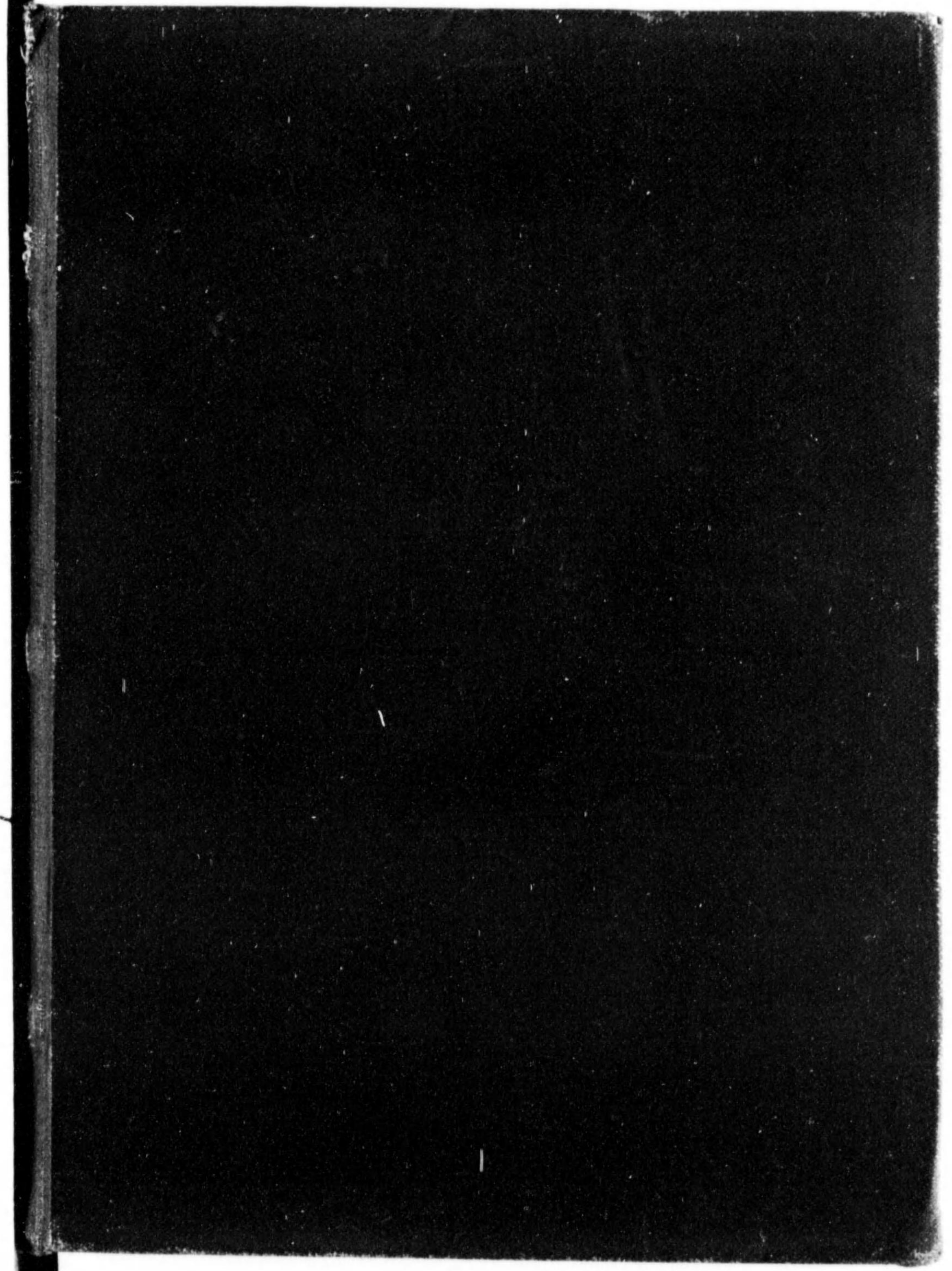
三寶鏡三昧講義

全一冊 近

刊



44
519





019725-000-4

94-319

单刀直入

若生 国荣/著

M37.10

ABG-0530

